1967

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十三年三月十三日發行（毎月一回十日發行）

京城雜筆

永樂町人 編輯

三月號

【第六十六號】

京城雜筆　三月號目次

花……永樂町人……(一)
朝鮮五元論……小野久太郎……(二)
抱膝獨語……角田廣司……(三)
金の力に就て……隈汀生……(四)
或る人間の言葉……野崎眞三……(五)
懷舊閑話……篠田治策……(六)
松本さん……久松前平……(七)
鮮展を前にして……加藤松林……(七)
沙翁とゴルフ……寺澤寛叡……(八)
河豚食はざる記……守屋三葉……(九)
忙中閑話……河野誠……(九)
思潮と自己創造……有馬純吉……(一〇)
店頭雜筆……堀內滿輔……(一一)
京城財界大觀……西本量一……(一二)
朝鮮の鐵道界……岩本撫樽……(一三)
朝郵の新局面……別府八百吉……(一四)
私の趣味……藤井寛太郎……(一五)
朝鮮の民族性……大垣丈夫……(一五)
株界雜筆……中村櫨園……(一六)
物語作家……西村滿藏……(一七)
朝新外交部の人々……大島勝太郎……(一八)
京日廣告部の人々……池畑健三郎……(一九)
井戸を出た蛙の話……加藤賢……(二〇)
寺田壽夫氏……下村生……(二一)
保險屋さんの話……河西青苔……(二二)
新しき道……高木背水……(二四)
阮咸餘戲……寺田壽夫……(二五)
古代の信仰……工藤武城……(二六)
短歌の話……細井魚袋……(二七)
或る日の靈聲氏……下村生……(二八)
豐公雜感……永樂町人……(二九)
財界豫言……岡村介石……(三〇)
編輯餘錄……一記者……(三〇)

辯護士法學士　榎本隆　京城明治町二ノ一〇五

月刊雜誌　趣味の世界　發行所　京城黃金町日本生命ビル內

永樂町人著　人生雜記　發賣所　京城雜筆社

永樂町人著　漢京一年　發賣所　京城雜筆社

大正十三年三月十一日印刷
大正十三年三月十三日發行
（一部定價金二十五錢）
發行兼編輯人　京城府和泉町一六四　松本武正
印刷人　安上福
印刷所　京城日報社
發行所　京城府和泉町一六四　京城雜筆社

京城雜筆

花

永樂町人

◇

稻、麥、松等にも、花がある。
但し、其の花は、形ち、色共に、發達の程度が、低い。
何故だらうか。
彼等は、『風媒花』だ。
昆蟲を、誘ふ必要がない。
それ故、媚態を、省略して居るのだ。

◇

自然は決して、無駄なことをせぬソコに、彼れの賢明が、畏れられる。

◇

蟲媒花は、皆、美色がある。
或は、芳香がある。
言ふ迄もなく、昆蟲を、招來する爲めだ。
併し、何故に、一々、色相を異にするか。
種類に依つて、種類の異る昆蟲を招く——。
それ故、相手方（昆蟲）に、目標を異にして觀せねばならぬ。
同一色では、間違が生ずる。
或は、亂媒に、陷ることがある。

◇

芳香は、白色の花に、殊に多い。
何故だらう。
白色は、割合に、目立たぬ花だ。
それ故、香氣を高うし、强うせねばならぬ。
コヽでも、自然の賢明を、發見する。

◇

開花植物の原始型は、離瓣花冠である。
即ち椿の如きは、舊式の花と言はねばならぬ。
離瓣であつて、無暗に、扉を開くが故に、椿には、雜多な昆蟲が來る。
昆蟲は、徒らに、花蜜や、花粉を濫取する。
即ち椿などは、未開の種類と言つて宜い。

◇

朝顏は、漏斗狀の花を開く。
亦た瓣と、瓣とは、明に癒合、密著して居る。
董の如きも、其の一だ。
漏斗狀で、花筒の底深きが故に、『吻』の長き昆蟲、體の小なる昆蟲でなければ、潛入することが出來ぬ。
即ち彼れは、相手方を限定して居るのだ。
是れは、植物の進歩である。

◇

五百三十種の花に就て、色彩を比較、觀察したものゝ說に依ると、
四、五、六月の花には、白色が最も多い。
七八月の花には、黃色が最も多い。
九、十月の花には、紫碧が最も多い——。
私は、コヽでも、自然の聰明と言ふことを思ふ。
何となれば、九、十月の郊外は、草木が、紅黃化する時だ。
花が、紅黃であつては、其の効が尠い。
玆に於て、紫や、碧や多い。
何たる自然の慧巧さだらう。

◇

花の色は、種々だが、其の原料は極めて簡單なものだ。
花青素と言ふ液體があつて、それが、細胞液中に、溶和して居るから、種々の色相を、發現する。
中性なれば、紫色の花が咲く。
酸性なれば、淡紅や、眞紅の花が咲く（是れは、其の度合に應じて）。
アルカリ性なれば、青色の花が咲く。
黃色は、黃色液がある爲めだ。白色は、細胞中に、間隙があり。ソコに在る空氣が、光線反射をする爲めだ。

◇

材料簡單にして、應用は廣い所に——私は亦た、自然の賢明さを觀る。

◈俳の兩先生

山村善吉

殖銀の露聲森悟一氏と李王職の螺炎今村鞆氏とは、今から七八年以前、一方は光州殖銀の露聲として一方は濟州島の螺炎として、共に全南に在り、木兎會を興して光州日報紙上に、盛んに句作し、宗匠を以て鳴つて居たが、今亦京城に會するに及んで、而も既に數歲相對峙し乍ら、一向に兩氏共句作せぬ。句作は秘かにやつて居るかも知れぬが、發表もせねば、全南當時の調子に句會で氣焰を揚ぐることもせぬ。そして兩氏軌を一にして云ふ『苟も藝術を以て自負する自分の句を、句會などに强いられて、濫作するには忍びない』と

京城雜筆

朝鮮五元論

朝鮮經濟日報社長　小野久太郎

【二】

內鮮融和は言ふべくして容易に實現し難い、と云つて朝鮮統治上之を顧みぬ譯には行かぬ。併し融和は自ら心的融和と物的融和とに分解されるのだから心的融和が實現し難いとすれば、之は須永く思想の善導に俟ち、先づ物的融和を促進すべきで、我田引水かは知らぬが、私は先づ經濟的朝鮮の建設を促進せられんことを提唱する。經濟的朝鮮を建設せんとすれば、先づ行政區劃と經濟區域の統一融合を期せねばならぬ。於是朝鮮の地勢、交通、風習、經濟の各方面から觀察して私は朝鮮を五道に統一すべきことを痛切に感じて居るものである。

鷄林八道と言ひ古した朝鮮を更に五道に縮めるとは隨分奇怪に感ぜられようが、實際に於て近頃は官署の配置なども次第に五元に歸しつゝある。郵便局も五分掌局で統轄され、財務監督局も五箇所に設置されんとし、覆審法院は三箇所であるが物足らなく感ぜられ、專賣支局と稅關は四箇所に配置せるが、北鮮一帶を京城の專賣支局が管轄したり、湖南一帶を釜山と仁川の稅關が分掌するなど、此の處官署は四箇所なるが故に、相當の無理がある。殖產銀行の前身たる農工銀行は一道一行から次第に廢合されて、後には咸鏡、平安、漢湖、慶尙、全州及光州の六行となつた。今日農工銀行が現存するならば、恐らく全羅道の兩行を一行に合併したかも知れぬ。

斯くの如く朝鮮五道統一は机上の空論ではなく、既に實際に於て行はれて居る。中部朝鮮、北部朝鮮西部朝鮮、南部朝鮮及び湖南朝鮮の五道に統一さるれば、朝鮮の行政區劃と經濟區域は理想的に一改して經濟的朝鮮の建設を如何に促進することであろうか。

近頃朝鮮に大都市が一時に殖えた大平壤、大大邱、大群山、大光州最近裡里の如き大々的裡里と稱して盛んに財務監督局設置の運動を試みて居る、朝鮮の新開地ほどグレートを濫用する處も外にはあるまい、併し夫れだけ土地に對する愛著の念が深くなつて頗る喜ばしき現象であるが、グレートを冠しつゝも知らず識らず其の地方の區域が次第に限局されつゝあることにお氣付きがない。

大々的裡里が大々的裡里地方となり大群山が大群山地方化し茲に經濟圈の擴大と共に渾然融合すると遂には大湖南地方となる道理で地方の人の地方的色彩も次第に大きく畫かれつゝあつて、私の五道統一主義に引き付けられつゝあるを觀て私は更に朝鮮五道統一を絶叫したくなつて來る。

私は既に朝鮮が五道に統一されるものとして私の職務に忠實に働いて居る。近頃商業會議所の無用論が起つて居るが、私も無用論者に共鳴して居る一人で、寧ろ今の商業會議所を廢して朝鮮五地方に實業會議所を設置し、農工商全部の機關とするが當然であると思つて居る。取引所問題も近頃は中々盛んであるが、之も全鮮五地方に一つ宛設置することを前提とし、文化經濟力の微々たる北部と西部の朝鮮だけは暫く設置を見合はせ、當分三箇所に置けばよいと思つて居る。

桓武天皇は平安の都が四つの山で圍まれ、朱雀、玄武、青龍、白虎の四神が照應しますといふので之を帝都に定められた相だが、朝鮮の都邑は凡て此の四つの山に圍まれた所謂摺鉢の底にある。摺鉢の底なるが故に都市の區域に限りがある。之を經濟都市に化するには四通八達の道路を開く爲に隧道や鑿開道に多費を要する。摺鉢の底なるが故に汚水が流下して非衞生である。都市の經費は主として教育、土木、衞生に要するのだが從來の朝鮮都市は、必然的に金がかゝるやうに出來て居る。之を知りつゝも土地の死活問題だなどゝ騷がれて道廳一つ移轉することも出來ない。併し眞の朝鮮を建設せんとするには、先づ朝鮮を五地方に劃し五地方中最も廣大なる要衝に政治經濟の中心都市を建設し、凡てを此の五道によつて統一すべきであると思ふ。

私の朝鮮五元論とは之を意味するので或は淺薄な議論かも知れぬが同好の士は朝鮮統治の根本義から大に之を研究されたいものである

『都市か田園か』

河野さんの新著

『都市か田園か』は京城府土木課長工學士河野誠氏の近刊書で、都市や田園の學理的考察を骨子となし、所々に著者の豐かな感想を加へたもの、新らしき學術と思想とを新しき文章の革袋に盛つた趣味多き書籍である

抱膝獨語

マアお互に高慢チキなことを言はぬことだ。京日の紙面がどう改善

に合併したかも知れぬ。

斯くの如く朝鮮五道統一は机上の居る。取引所問題も近頃は中々盛んであるが、之も全鮮五地方に一

京城雜筆

抱膝獨語

京城日報社　角田廣司

○

正に君の言の如しだ。

成程、僕は今京城日報政治部長兼編輯部長であるわけだ。僕を働かすべく社は種々な約束を肩書につける。しかしだ。僕は何にも言はんでも働く男だ。願くば働き甲斐のある仕事をしたいものだ。

○

今に見ろ、編輯何んか行つてると秋山忠さんのやうに青い顔になるといふのか、御心配淘にありがとふ、だが顴の青くなるとかならんとかは要するに素質の問題であるお蔭樣でこの通り血色は至つていゝのだ。艶々してゐるのだ。悪口屋は磨き込んであるなどゝ皮肉る程だ、一二杯日本酒でもウキスキーでもいゝからのませて見給へ、ほんとふにいゝ色ネ——とくるから。

○

政治部長だとか言つても朝鮮に第一政治記事があるかいと言ふのかこれはイヤハヤ恐れ入る。馬鹿も大底といふことがある、内地に政治記事があるなら朝鮮は猶のこと政治記事があるのだ。そんな愚問はちやうど、朝鮮の民衆が政治趣味を解するかと云ふのと同一だ。朝鮮民衆の——今日迄の彼等の生活史を見ることだ。政治は三度の飯よりも大好きなんだ。政治趣味を解すると大底は恒産をなくしてしまふ。あまりに血のめぐりの不良いことは言ひこなし。

○

何に？朝鮮の新聞は電報記事が多くて地種が少くないといふのか。之れをいかにも名論かの如く一大發見かの如く言ふのか。昔はそんな事をよく聞いたものだ。マタそうも一般が思つたこともあつたものだ。しかし今頃そんなことを言ふのは馬鹿々々しいはなしだ。時代が違ふ時代が。要するに之れは屁理窟と言ふ代物だ。新聞は今や地方的から全國的へ、さらに國際化の時であるのだ。

○

現代人の智識の慾求がまさにその通りだ。現代人の生活がソレを猛烈に熱求してるのだ。第一にその熱求に反逆する新聞を作ることは極めて無意味のことだと思ふ。第二にそんな新聞は讀者が共鳴してくれぬと思ふ。朝鮮の讀者は内地の出來事を知ることを要求する。世界の出來事を知ることを熱望する。

○

モウ萬事が屁理窟ではない實行の時代だ。讀まれる新聞を作ることだ。而してよく賣れる新聞を作ることだ。しかし、ことわつておく之れいゝ新聞であるかどうかは自から別問題です。

○

僕のも屁理窟だと云ふのか、屁理窟でもまたは見解の相違でもいゝ僕は議論する遊戯を好まぬ、大嫌いだ。實際議論せねばわからぬ程左樣に頭腦がわるくては困る。ことはだまつて事實に徴しやうではないか。何も別に四の五のと青筋を立てる程の問題でもあるまい。

○

マアお互に高慢チキなことを言はぬことだ。京日の紙面がどう改善されたか、ソレともどう改悪されて行くか、どつかの新聞のやうに御用黨の、しかも何等の哲學を有せない一私人の機關新聞が、下らぬ屁のやうな問題までも讀者否國民を欺いて、公平な自由な立場の報道の出來得ないのと違ふか、違はぬか、ソレは自からわかろう。

（二月廿日朝）

◈葉卷の煙

牧野五郎

野崎眞三君と言へば、京城の新聞界で、特に社會部方面で、無類の活動家として、知名の一人物だがこれほど原稿を書くのに早やい人は、先づ斯界でも鳥渡類があるまい、二段や三段のものは、殆ど人と話す片手にサッサとまとめられて行く◇始めつから記者として生れついたやうな人だ◇人間は、鳥渡せつかちに見へるが、よく話して見ると、一定した人生觀もあるし、一事一物に對する見解も、それ〳〵特殊の見方がある◇先づ新しい型の新聞記者として、京城の一名物と言つて然るべき人間だらう◇河西青苔君と云へば、京城日日の花形で、麗筆家であるが、此人には文士氣質で一つの妙な癖がある◇それは廿枚で完成する原稿の第十五枚に於て、若し一字を書き損じた場合がありとすれば、彼れは始めから書き直さなければ氣が濟まぬ男である◇だから、若し雜誌寄稿の依頼でも受けた場合には、此の妙な癖のため、書き直しに忙殺されて慘憺たる苦勞をするといふ。

を新しき文章の革袋に盛つた趣味多き書籍である。

京城雜筆

金の力に就いて

隈汀生

世には黄金の力を過信して、人生の幸福は唯黄金に依つてのみ得らるゝやうに思ふ者が多い。成る程或る程度までの富は、心身の便安と社會の安寧とを圖るべき手段の一つであつて、決して哲學的輕蔑を下すべき瑣細の物でないことは明である。然れど或る程度を超えたる富は、最早自分にて使用することは出來ぬものだ。渴したる者に取つては、萬金の財寶よりも、一杓の水の方が有難いといふことは最近東京の震災時に於て明に立證せられた。然し其の水も既に渴を醫し得たる後には、何程あらうが同じことで、功用は唯一杓で足りるのである。如何なる物でも此通りで、融通自在の金錢にも、自ら使用に相應の限度があつて、過度の使用は、利益も與へねば、愉快も與へず、畢竟奢侈と名くる無意義の行爲となるのみならず、終には我に苦痛を與へ、使はんとした我が、却つて使はれるといふ不都合な結果を生ずる。又世間の人は總ての物は皆金にて買ふことが出來ると思つて居るが、實際を見れば決してさうでない。例へば我等の隣人が一坪幾何といふ地價を附けて、廣い山林を所有するとせよ我等は一層高い見方に依つて、其の所有主なる隣人の得るよりも、更に多大なる利益を、其の山林より收むることが出來る。即ちこゝに所有權を以て味ふことの出來ないものがある。美は賣買することが出來ない、隣人の物でもなければ、また我等のものでもなく、唯之れを樂み得る者に依つて所有せられることが出來、之を受くるだけの價値ある人に向つては惜氣もなく與へらるゝのである。銅臭を以て浸潤せられ營利以外に何等の理想を有せざる京城在住多數の紳士紳商諸君、卿等は果して能く、我等の從事する勞働中には、單なる金錢的報酬よりも、更に深い意義と、之に伴へる興味との存するものあることを解し給ふや否、伺ひたいものである。

或人間の言葉

加藤博士

京城府衛生課長　山口三太郎

眞理は賣買せらるべきものでなく、正義は授受せらるべきものでない。語を換へて言へば、最善のもの、眞に望ましいものは、一切金錢を以て買ふことは出來ない。而も此等は、自由に我等の手に入られるのである。これと同じく、考へてみると原稿を依頼するといふことは隨分ズーズーしいことだ東京あたりの大雜誌なら又格別だが、讀者の數の多くもない生れたばかりの湯氣の出てるやうな本誌などから、頼まれることは、即ち單にそれは、時間と自由と快樂と靜思とを奪はれる事で、酬いられるところのものは一もないのである。けれども成るべく廣く成るべく名家に依頼しないことには本誌は立行かぬ。茲に於てか、社内では色々苦心の末懇願的命令といふやうな文化生活の理法を無視したやうな一種の戀態的な武器を以て只管御願ひするに止まるのである頼まれる方は一種の迷惑と壓迫とを感じらるゝに相違ないが、コチラはそんなことをお構ひなしに只それ頼むのであるから、本當に蟲のいゝ話しだ位のことは辨へてゐます。斯くして遂には諸名家の頼まれつぷりを觀察し、考究し、批判し而して又これを誌上に載せるんだから、どうせ我等は極樂には行けつこはない。さて近來の頼まれ方の中最も痛快味のあつたのは京城府衛生課長加藤賢博士だつた『吾輩は讀む方は有力な讀み手だよ、非常に面白かつたので貴誌は毎晩寢床の中で隅から隅まで眼を通してる。然し近來非常に忙しくて書く方は御免だ。今日は土曜だから今から歸つて寢るんだ』『まだ三時ですぜ、今から寢ちゃ早いでせう』『タマには澤山寢ないと衛生上悪い』『明日の日曜にお書き下さい』『内容外觀共に碌なものは我輩には出來ないよ、それでよければ明日書かう』

右は其時記者との問答だが其間一場の洒脫味が流れ、しかも頗る明瞭で迅速である。醫學博士と聞いて色が生白く指は細く、氣取つたやうな聲が半分女性化した響を以て天外から洩れるかと思つてゐると、風雲に乘ずる革命兒の如く精悍の氣眉宇に溢れ指は細いけれど節くれ立つて長く、產婦人科のお醫者さんには鳥渡向きさうもない方である。

記者は熟々加藤さんの存在を京城男兒のために祝福したいやうな氣になつた。

私に君の其生活信條が是認出來るか。君が位置を換えて此病苦を忘れ得るか。刻々募る胸腔の中の疼

ば、また我等のものでもなく、唯之れを樂み得る者に依つて所有せんだから、どうせ我等は極樂には行けつこはない。さて近來の頼ま

京城雜筆

或人間の言葉

朝鮮新聞社　野崎眞三

最う餘程前の事だが江原小彌太君が久方振りで京城を訪問した。長谷川町の山口皐天君の病室で初對面であつた私は直ぐ舊知の如き親しみを感じた。私達の話題は死と死後に就いてであつた。皐天君は御承知の通り南大門驛頭の爆彈に傷いて幾度か死線を越えてゐるだけ人間の死に就いては眞劍な考察を持つてゐた、そして氏は人間生活の總べてを宿命で解決し神を認めてゐる、死は心靈が人間の屍から宇宙へ還元するのだ、そして心靈は不滅だと云ふやうな意見を話されたと記憶してゐる。江原君は最近心靈研究が得意の壇上であつた丈に盛に心靈界の奇蹟を說いたそして歐米の心靈學の科學的研究さへ引證して話してゐたが私は全く反對な私の心持を述べて約二時間に亘つて議論に花を咲かせたのであつた。私は死と云ふものを人間の最後の頁だと思ふ。死後の心靈なぞは白日の夢に等しい。私は神樣と云ふものを否定する、勿論此世の中に人間以上の力のある事は事實であるが之は所謂凡人以上の意味で決して人間以上の神ではない。例へば基督は神ではない從つて基督を信ずると云ふ事は偶像とか神樣とかの基督を信ずるのではなく己の內に基督を見出そうとする精進と敬虔であると信じてゐる。

江原君達の考方とは根本的に違つてゐる。此點で私は江原君は嫌だ同樣賀川豐彥君も嫌ひだ。

更に私の生活の信條は一瞬一瞬を眞實に美しく快く生きやうと云ふのである。私は私の環境から眞實なもの、美しいもの、正しいもの快いもののみを凝視してゐる。そして私自身の生活から生れる虛僞醜惡、不正、不快と云ふ方面は秘めて消して忘れて他人を禍しない事を念じてゐる。悉べての人間が斯うなつた時こそ或理想境へ到達するのだ。私は斯く信じ斯く人生の行路を辿つて來たのである。今後も斯くあると思ふ。私の此主張に對し病皐天君は口を切つて云つた『忠實な一新聞記者として執務中に得た死に近い此病驅を抱へた私に君の其生活信條が是認出來るか。君が位置を換えて此病苦を忘れ得るか。刻々募る胸腔の中の疼痛を君は打消し得るだらうか』。成程と私は答に詰つた。然し頑健で元氣旺盛な私には皐天君の場合は悲しい例外だと思ふより他にはない、そして皐天君一人の存在の爲に私の信條は毫末も搖ぎはしない又搖がせぬ決心だ。江原君と病皐天君とは聲を揃えて私に云つた君の信條も可なりだ。其信條で一生涯を終れない時が來るに違ひない、それ迄は最う御互に水掛論だから……』

そうだ。私は此信條を一生涯貫かずには置かないと堅く〳〵決心した。

——一九二四、二、八——

◈卓上閑話

吉田莊吉

□

鐘路一丁目角田洋服店の支配人川端氏は先年洋行したゞけに新らしい思想家で泰西の名著を原書でスラ〳〵讀む位は朝飯前だとの噂

□

取引所の中村都一氏は櫨園を號し經濟を民衆化したやうな株の事などを本誌にも連載してゐるが、琵琶歌の作者としては實に優れた天分を持つてゐる。一昨年作つた『石田三成』及び『關ヶ原』の如きはかの故南部露庵氏の湖水渡と並び稱すべき名作である。氏は近く太閤が明の封册を退け『我を日本國王に封ずとは何事ぞ』と喝破した場面を國體尊崇の思想から執筆するため目下參考書を蒐集中ださうだが、出來上つたら京城の讀書界や琵琶界の評判になるであらう

□

本號に歌の話を寄稿された細井魚袋氏は現に京畿道廳商工課勤務であるが、選者を依頼されてゐる數が朝鮮で三つ內地で二つ、どうかするとこの方が本職より忙がしくなるらしい。ビール會社の時田氏とは中學時代の同窓、何かの雜誌で魚袋の名を發見し、疑念を挾みながら、手紙を出してみた處が、やつぱり昔の細井君といふわけで十何年ぶりで一夕大に回舊談に耽つたとやら。細井氏は斯界の大家尾上柴舟氏の古い頃の門下である

□

明治町のパン屋木村屋の主人は非常な讀者家で殊に文藝の趣味を解し俳句を能くするさうだ。

京城雜筆

懷舊閑話

篠田治策

あゝ我等は赤門を出でゝより、春夏秋冬既に二十有餘年を經過して事多く志と違ひ、老ひ將に到らんとすれども、幸ひにして身體强健意氣潑溂、今尙壯者を凌ぐの慨ありとの自信はある。然れども一たび社會の人となり、おのがじゝ其好める方面に離散して以來……好まざる方向もあるが……共に遊び共に學び、四方の志を抱きて日夕苦樂を共にしたる舊友と相會するの機會は甚だ稀であつた。曩に御成婚式に參列すべく上京したるを好機として、一夕同窓の舊友と相會し、昔を語るの機會を得たのは近來の快事であつた。此の會員は明治二十四年第一高等學校に、新に佛蘭西語の一學級を設けた際、其豫科三級へ入學したる者で、英獨語の學級の如く、一年毎に離合集散することなく、大學の課程を終るまで八箇年間を通じて同級生であつた爲め、其の親みは一層深かつたのである。

十數年間相見ざりし友も來た。三十三年前に一高に入學した時は、何れも紅顏の美少年、意氣軒昂大に天下國家を論じた人々であるが友人等の顏を見比べると、中には目立ちて年老いたる人もあつて、眞とに今昔の感に堪へぬ。浦島太郎の物語りは、恐らくは斯かる情緒より引き出されたであらうと考へても見た。

酒酣にして興は愈々加はり、懷舊談に滿座哄笑、時の移るを知るものなく、ストーム、寮雨、萬年床の懷古より、彌次の御大、賄征伐の張本人、ストライキの敎唆犯に及び、或は蠻勇を奮つて本鄕警察に拘留せられたることや、學校を盟休して寄宿の寢室に寢會を催す常習犯のことや、寺院に間借して住職の不在中僧侶に化けて巧に葬式を濟ませたことや、無錢旅行の際人質に捕はれて進退谷まつたることや、奇談百出、無邪氣なる當年の惡戲を回想して、人は皆再び學生時代の氣分に若返つた。

來會者中に五來欣造君（號素川）も在つた。君は曾て九箇年間、佛蘭西に留學し、佛蘭西學者として有名の人で、現に日本の事情を佛國に紹介する爲めに、極東時報も經營し、又早稻田大學の敎授として講壇に立つて居る。學校を出た頃、讀賣新聞の記者となり、同紙に『東西兩京の大學』と、小說『まだ見ぬ親』を連載し、讀賣の發行部數を二倍にしたと評判されたこともあつた。而して同君は一面質實剛健なる運動家であつたと同時に、一面非常なる耶蘇敎の熱心家であつた。當時私は同君と共同して新橋附近の丸屋町に辯護士の事務所を開いて居つたが、青年の元氣に任せて、斗酒敢て辭せず、痛飲時に曉に達するとも屢々であつた。親切なる君は私をして宗敎に入り、態度を改めしむべく熱心に勸誘した。然るに私は每に故意に無神論を唱へて之を反駁して居つた。されども心潛かに君の親切と熱誠とを諒とし、君の宗敎論が私を首肯せしめ得れば、何時でも宗門に降服すべく約束して置いた五來君は辯護士の看板は揭げたるも、主として記者として活動し、

法廷に出づることは殆んど無かつた。然るに偶々手形訴訟の依頼を受け、一日法廷に出づることゝなつた。辯護士として一日の長ある私は、攻擊防禦の方法を注意し、一旦其手形を否認して歸ることの得策なるを語つた。君は此言に從ひ該手形を否認し、通常訴訟として續行することゝして歸つた。

君は事務所に歸り來つて、顏色蒼白、意氣銷沈、或は疾ある者の如く、頻りに歎聲を發し、時に合掌瞑目して神に祈りを捧ぐる樣であつた。事務所員等は先づ驚き、私も亦奇異の感を抱き、其理由を問ふた。君の答へは斯うであつた。

今日君の注意により、法廷にて約束手形を否認したるも、事實眞正の手形に相違無きを知る。眞實を否定して虛言を吐きたるは、神に背き一大罪惡を犯したるものにして良心の苛責に堪へざるところであると。是に於て私は直に法理を說いて君を慰撫した。即ち君は代理人だ。代理人の行爲は本人に對して効力を生ずるのである。虛言を吐きしは君に非ずして本人だ。何等意に介すべき問題ではないではないかと說明した。すると同君は何に、本人に對して効力を生ず？然り々々と手を打つて飛び上り大悟徹底、喜んで事務室內を躍り廻つたことがあつた。

勿論右の懷舊談も其席に持ち出された。二十五年來の懸案であつた五來君が宗敎を以て私を濟度する問題は私が法律を以て五來君を濟度して了つたのであるから、五來君の負けと議決された。

同夜五來君は爲めに、各人より罰杯を仰せ付かつて頗る辟易した。バイブルには、酒を飲むなと命じた文句は何處にもないとの輿論に再び沙からず狼狽して居つた。

松本さん

朝鮮新聞政治部長　久松前平

に八尺位の大作で構圖や調子についてもいろいろ話し合つたことですが、確に期待するべきものと考へます。

三宅萬象君は暫らく逢ひませんが

京城雜筆

松本さん

朝鮮新聞政治部長　久松前平

松本さん！意義ある大正十三年新春劈頭『京城雜筆』の題下に新聞紙法に依る雜誌を發刊されたことをお祝ひ申上げます、お喜び申し上げます。

私共はあなたが永樂町人として朝鮮の文壇に一頭地を抜いた麗筆を振はれて居られることを我々後輩の誇として居ました。

しかし私共あなたの全人格を知つて居る者は、二、三人寄り合ふ度毎に『あなたは何故永樂町人で滿足してるのだらうか、何故自分で新聞か雜誌か主宰されんのだらうか、何を考へて居られるのだらうか』と、はがゆくお噂をし通して來ました。

京城雜筆を手にして欣喜雀躍しました、仰せの通り小さい雜誌です形は何うでも宜いです、あなたの大小の新聞を起したり潰したりした尊い經驗の一部分でも世の中の人に知らせることの出來る機關が生れた丈で私共は滿足に堪へません。

全頁を通じてあなたの先輩、あなたの舊知、あなたの後輩諸氏が心で、ものした原稿で飾られて居るのが何よりの證據ではありませんか、私は一讀再讀しましたそして筆者の名前を何度も繰返へして喜んで居ります、きつと權威ある雜誌になります、又なさねばなりません。

長い間好くこそ辛棒なさいましたそれを思ふと感慨無量です、あなたも必ず御同感と思ひます。

一寸考へて御覧なさい掛井さんは鮮銀の理事、森さんは殖銀の理事篠田さんは李王職次官、水口さんは總督府理財課長、玉井さんと久保さんは實業家、伊藤さんは毎日申報の編輯部長、京仁に居る人丈けでも當時の平南時代からすると大變な違ひではありませんか。

私も四人の親になつてますもの、長女は生後二十日で亡くしましたが殘三人は元氣です二女が今小學校の一年生です、兩親も當地に來て貰つて居ます。

私は一人者であつた爲めに何時も思ひ切つた事が出來ず平凡に暮して來ました、そして遂々落伍しました、然し愈京城に落ち著くことになりました私はこれから一年生になつて天職を全ふし度いと覺悟して居ります。特に御健康を祈ります。

鮮展を前に

日本畫家　加藤松林

――今年は鮮展も第三回です。多少は面白いものが出るであらうとは世間の評判であります。世間ばかりではなく、畫家仲間でもさう思つてゐるし、私にもそんなふうに考へられます。

新しい人たちと言つても必ずいゝ人ばかりとは限つて居りませんが。大木豐年君などは確に期待さるべきだと思ひます。蔦谷龍岬氏の秘藏弟子で、帝展の新進で朝鮮支那を見て來たいと出た旅の途中朝鮮が非常に氣に入つたとてもう一年から停つてゐるのですが、展覧會へは馴染深い豐州の影池の傳説を描きたいと言つてをります。四尺に八尺位の大作で構圖や調子についてもいろいろ話し合つたことですが、確に期待さるべきものと考へます。

三戸萬象君は暫らく逢ひませんが聞くところではやはり昨年のやうに山を描くさうです。何にしても去年は東洋畫部の首席ではあり、人々の期待も殆んど君一身に集つてゐるやうな工合であるから勢ひ緊張せずにはゐられないでせう。

柴田柴門君は今年、秘苑の春雨を描くさうです。昨年はどうしたか成績も悪くて賞にも入らず不遇の日を送つてをりましたが、今年こそはと愈々努力してゐます。すぐ近所で始終往來しますが、良い作品の出來ることを祈つてやみません。

新しい人では陳内松齡君が居ります。相當の年ではあり、ずつと東京にゐた人で、平常の作品とは違つたものを描くことと思ひます。

片山坦、佐々木蕉の月二君も今年から出す人ですが、まだ年も若く若き故の熱もありますから鮮展にとつては目新しい作品を作ることでせう。

この外にはさう期待さるべき人たちはありません。鮮人側では李漢福君をただ一人の目標とするばかりです。

◈釋尾氏の東京行

小山徹夫

釋尾東邦氏が、東京に行く、流石に二十年の朝鮮生活に飽いたものと見へるゝが、是れが爲めに京城は一名物を失ふ。何と言つてもあの率直、清純な性格は、光つて居た、儼として一つの敵國だつた。我々は、ほんとうに寂しいと思ふ東邦氏近來健康佳ならず、切に加餐を祈つて已まぬ。

京城雜筆

沙翁とゴルフ

朝鮮ホテル支配人　寺澤雹叡

シェクスピヤの偉大なる天才の發露が、普遍萬能であつたことは、誰しも知る處である。乍然、彼が運動競技にまでも、廣大無邊の智識を持つて居つたことを知る人は至つて稀であらふ。

彼が百般の事物に對し、餘りに精通して居つたゝめ、其天才を基準として彼の人物を測度するとき、或は彼を法學者と稱し、或は醫伯に擬し、或は水夫教師軍人藥劑師唯心論者など、とり〳〵の評も起るが、斯は僅かに彼が天才の邊幅を、擬人化したゞけのことである

彼が智能の眞の閃きは歴史科學政治哲學など云ふやうな人類の副産的問題ではなかつた。寧ろ人類の福祉と云ふ點から考へ、頗る重要な環境をなせる民族の慰籍と云ふ事に表はれて居つた。而して彼は此民族の慰籍を娯樂に求め、娯樂を高尚な運動競技に胚胎せしめんとしたのである。

彼は此主義に立脚して、騎射、テニス、鷹狩、漁獵等の技術を熱心に研究したが、彼の希望に較べては隱らぬ點が多かつた。彼はゴルフを知るに至り始めて釋然自得したのである。

彼がゴルフを知つたのは、旅役者となり蘇國に赴ひた時代で、戲曲マクベスの資料を蒐集するため、古色掬すべき蘇都の城市に、暫く掩留した際である。彼は蘇國々粹競技のゴルフを研究すべく、各所のリンクスを訪づれた。

『海國の古都市』と歌はれた蘇國に對する彼が、積年の憧憬は、彼が一度英蘇の國境を越へて、其風物に親接した時、一層熾烈になつた。

蒼　に露繁き月明の夜、古城の望樓に詩腸を洗ふた述懷や、音なき雨の音を聞く落花の朝、堂宇の檐を去來する雨雀に吟魂を腦ました

追想は、蘇國を去つた後も、彼が腦裡を離れなかつたものとみへ、彼が戲曲の全班を綾なす經緯となつて居る。而も其裡に織込まれたる崇高な此國粹競技は、幾百の比喩となつてゴルフの精華を誇つてをる。

彼はゴルフの競技を以て、有爲轉變極まりなき人生の影を寫す明鏡と、解釋してをつた。第一球座に於ける開始打球より、最終綠蔭の打込に終るまでの歴程を、人生の繪卷物と做してをつた。彼の說によると『善良なゴルファーは必然的に善良な人である』とまで斷言し得なかつたが、ゴルフ競技が最も明確嚴正に人格を裏書すると云ふ事を知つてをつた。彼は此競技により、一は以て自己修養の道を求め、二は以て人生に對する默示を得んとしたのである。故に彼はゴルファーが球座に立つて構姿をなす場合

心平かならざれば目は屢人を欺く（詩集）ことを戒め打球の刹那に在ては我命運は此一跳球の上にあり（アントニーエンドクレオパトラ）

と天地と念することを教へ、打球意の如くならず失敗を招きたる時は過ぎし不幸を悔むは新たに不幸を招く所以なり（オセロ）

去りし重苦を我記憶に荷はしめざらむことを（テンペスト）

亦た各蟲多く利あらざるに至るも悲哀の來るや單獨なる牒者として潛み來るに非ず常に大隊となつて襲擊し來る（ハムレット）

と達觀し飛球障害物に近く落ちたる時は

過去と未來は最良なり現在の事物は凡て最惡

と感念し、勝敗の數既に定まりたる時に於ても、謙讓を德として徒に自己の技量を卑下することなく

汝が舌をして恥辱の舜者たらしむる勿れ容姿は殿勲に言語は將さに堂々たるべし（コメデイオブエロアース）

と記憶せよと陳べて居る。猶此他處世觀や人生觀につき、頗る剴切巧妙に比喩して居るものが多くあるが、淺學な予には難解の點が少なくないので茲に擱筆する。

要するに、ゴルフは斯の如く頗る崇高有意義のもので、決して片々たる才子が弄び得る娯樂ではない我國では施設の關係上、會員をして多大な經費も負擔せしめねばならぬので、ゴルフ競技をブルジョアクラッスの譽澤三昧と考へる人もあるが、誤解である。米國では既に人心に及ぼす此競技の特長を認め、各所に無料リンクスを公開してをるではないか、ゴルフは其外面的の働作から見ると、而立時代の人には稍物足らぬ感がないでもないが、其處にゴルフの妙趣がある譯で、所謂悍馬を制すが如き魔力が此技の裡に潛在してをるからである。不惑より知命時代の人に對しては可否を論ることが寧ろ迂濇である。唯一言靈と肉とを養ふ修養の糧であると云へば十分だ

河豚食はぬ記

命には代へ難し召し給はぬこそよけれ物好き半分に召し上らるゝ殿方の御心うたてき限りにこそ侍れ

『海國の古都市』と歌はれた蘇國に對する彼が、積年の憧憬は、彼が一度英蘇の國境を越へて、其風

過ぎし不幸を悔むは新たに不幸を招く所以なり（オセロ）

去りし重苦を我記憶に荷はしめ

京城雜筆

河豚食はぬ記

朝鮮殖産銀行　守屋三葉

去んぬる二月十四日夕海神の祟ありて船動かず一夜を六連の島影に明かす翌朝風なごみ船動くにさては釜山へ向ひたるにやと勇みて起き出れば悲しや船は下關へと逆戻りの最中なり十八日は京城にて總會を控ふるに留守居の人々如何に氣を揉みつらん思へば殘念なることゞも也偉さうな顏したりとて風吹けば渡りも得せぬ人力を今更の如く憐れめども詮なし春日影漸く長閑けかりし京大阪をば急ぎに急ぎて旅立ちけんことの口惜しさよ急かずば濡れざらましをと詠みけん人のことわり今更身に迫りて遣瀨なき心地す

船より追ひ出されて宿を求む、早や先客にて何處も滿員也、十年餘りの馴染なればとて某旅館を訪るるに空室とてもなしと木もて鼻つまんだる御挨拶なりむつとして門を出れば海邊の柳折からの風に揉まれて絲の如し辻車を呼んで即ち大吉へと志す

宿かさぬ人のつらさを情にて
　朧月夜の花の下臥し

宿かされぬが幸にて音にきく大吉河豚料理の本場に御伴を命ぜられたるは三葉近頃の不當利得なり、茶來り菓子出で、褞袍に著代へて籐の安樂椅子による窓外壇の浦の風光を寛めて魂魄凄く塵外にあり即ち碁盤を呼んで烏鷺三味に入る數分前の鬱情須臾にして散じ身今何處にあるやを知らず

仲居政女なるものあり、大して美人といふにはあらねど三十を過ぎて間もなかるべく物腰いとあはれなり晝近ければ料理は何を召し給ふや河豚にせずやと言ふ河豚と聞いて三昧忽ち破れ首を振りて眞平御免なり普通の料理にて結構なりと恐懼措くところを知らず政女至りて怪訝の面持也、實にや天下の粹士船より汽車に汽車より船に乘換への合間をこゝに遊ぶもの皆海國第一河豚料理を命ぜざるものなし然るを朝まだきより乘込みながら此家自慢の手前を封して平然臺居するもの近頃以つて不屈千萬の奴ばらとや思ひけん、しかしそこはさるもの如何に美味なればとて命には代へ難し召し給はぬこそよけれ物好き半分に召し上らるゝ殿方の御心うたてき限りにこそ待れと言ふ、河豚はかくして遂に食膳に上らず

歸來ゆくりなく永樂町人に會す、席偶々俳仙露鑿理事ありこの話をきゝて御機嫌頗るなゝめなるものあり、寶の山に入りながら寶を得ずに歸しも同然天下之に過ぎたる無粹やある正に京城紳士の名折とも知らずや此の贖罪には何れ京城雜筆に於て其の顚末を公表すべしと仰せらる、町人ホヽ笑みて叉ぬからず同意す即ち一文を草して日頃の文債に代ふ爾云

忙中閑話

京城府土木課長　河野誠

何と云つても、人は地を踏んで居る。そしてその地の面が氣になつてならない。さればこそその地をよりよきすみかたらしめやうと、人は額に汗をかく。かくして地上點々、バベルの塔は築かれて行く。

しかし如何に高く築き上げたかうとて、それは決して天の懸け橋とはなり得ない。

地に跡を印する事を、己が職業とせる所謂技術者の心すべきは實にこゝである。

しかと地に立てるものは、又自づから高く天を仰ぎ見る。しかし又路傍の隅石につまづくの愚をも操り返さぬであらう。

『眞に偉大なる技術者は、又眞に偉大なる思想家でなくてはならぬ』と誰かが云つた。

眞に味ふべき言葉ではあるまいか。

◇

大都市
其處では
香水の香りがたゞよつて居る
淫亂の舞踊が踊られて居る
金が笑つて居る
權勢が爭つて居る
お座敷文學がはやつて居る
それを喜ぶものは
惡魔か人か
村落
其處では
土の臭ひが滿ちて居る
純朴な百姓が耕して居る
小鳥が歌つて居る
魚が跳つて居る
鄕土文學が芽生へやうとして居る
それを喜ぶものは
人か惡魔か

京城雜筆

思潮と自己創造

京城日日新聞社長　有馬純吉

歐洲大戰の慘毒は、國力を靡爛し、文明を破壞し、人類の滅絶までも促がさんとしたが、其結果世界文明國民の精神界に革命的、驚異的大變動を齎らせるは何人も知る通りである。我日本も大亂の後を享けて凡ゆる方面に左傾的色彩を帶びざるはない狀態であるが、其最も痛烈に感ずるものは國民思想の激變である。所謂世界思想は今や全日本の社會の全面に浸透しつゝあるのである。而して既に恐怖すべき革命思想、過激思想は一部日本國民の精神界に注入され、培養されつゝあるは、最近我等が親しく驚くべき事例に接するに依つても明かである。當面の日本としては、ノアの大洪水よりも、バビロンの陷落よりも、ヴエスビヤスの大噴火よりも、又た昨年九月の關東大震災よりも最も恐るべく憂ふべきは我國思想界の現狀である。建國の體制を異にし、萬邦に冠絶する國體を有するからとて、今や平然として晏如たるを得ないのである。

然るに從來我國民も官憲も思想の如何に恐るべく尊ぶべく、而して其勢力の如何に偉大なるものであるかを知らなかつた傾きがあつた。否之を知るも之に善處するの道を知らなかつたのである。然るに戰後の近年に至り漸く危險思想の怖るべく、驚くべき勢力を有するものであることを切實に感知し自覺するに至つたのである。斯の如きは一面より見て我國の一大進歩とも云ひ得られないでもないが今に於て當局が一時に周章狼狽し來つて餘りに危險思想取締りに白熱的態度を取るも考へものである外形的强壓と迫害は決して無形なる思想を取締つて善導する所以ではないのである。

抑も思想は無形である。無形は無形を以て制するに依つて始めて効果があるのである。即ち思想は思想に依つて之を制し、或は之を防止し、或は之を善用せねばならんのである、乍併、吾等は思想問題の解決を以て全然有形の手段を除外すべしとの極端論者ではない。それは危險思想が外形に現はれて法律に抵觸せる場合には法の命ずる處に從つて斷々乎たる處置を執るの至當であるは云ふまでもないのである、けれども未だ形に現はれざるに先づ權力を以て禁束し、迫害し形の現はれたるものは何等の正體を究めずして妄りに重罰を加へんとするは吾等の執らざる處である。斯かる無理解の官權濫用は却つて益々彼等をして反抗の氣勢を昂めしめ、未だ危險思想に囚はれざる忠良なる國民をも、竟には思想上に於て、現代の制度に反逆を企てしむる結果となり、由々しき大問題を惹起するを保せないのである。

是に於てか思想は思想に依つて之を制し、之を同化すべく我國の學者、思想家は、所謂ボルシエヴキキの本體が如何なるものであるか、或はマルクスズムが怎んなものであるか、ボルシエヴキキが果して一般學者の解するが如くマルクスの學說に其根源を發して居るか、或はソシアリズムが何ものであるか、少なくとも現代思想として我國體と、或は我社會と相容れざるが如き思想問題は悉く捉へ來つて其研究し、蘊蓄せる論理に觀照し、眞理は眞理とし、謬誤は誤謬として嚴正明白なる批判を下し更に我國體若くは我社會との關係を究覈し、總ての結果は或は記錄を以てし、或は言論に依り一般社會に公表し、以て國民思想を啓導し、其趨舍する處を知らしむるに努めねばならんのである。旃れ思想界を率ゆる學者、思想家の眞の天職である。

我國民も亦深く省みる處かなからねばならんのである。我國民は何事にも模倣に長するが如く、外來思想、外來主義に對しても何等の考察と自覺なく、其儘鶏呑みにして徒らに其追隨せざらんことを之れ虞るの風がある。旃れ實に誤まれるの甚しきものである。要は外來思想なり、外來主義なりを能く咀嚼し、能く消化して自家の藥籠中に收め、以て自己創造、自己發展に資せねばならんのである。斯くて始めて外來思想中の危險分子は除外され、最も進歩せる文明思想は、我固有の健全思想と渾然一體を爲して、我國家をして、能く世界の大勢と順應せしめ國歩をして益々不羈ならしむるに至るのである。

◈短歌と野田氏

川田松造

殖銀商業金融課長の野田さんは、からだ中才氣といつたやうな所のある人だ▲だけそれだけ、いろいろの隨藝がある、中にも短歌はその最も長ずる所で、優に一家を成して居ると言ふ評がある。

る仕事だ、ろくな事が書けやう筈がない。

如きは一面より見て我國の一大進歩とも云ひ得られないでもないが今に於て當局が一時に周章狼狽七

クスの學說に其根源を發して居るか、或はソシアリズムが何ものでして一體學者の解釋なき如

の最も長ずる所で、優に一家を成して居ると言ふ評がある。

京城雜筆

店頭雜筆

ちゝぶや主人　堀内滿輔

◇

『俳句は殆ど絶妙の域に達し、文章道も亦た隅にはおけぬ、ちゝぶや主人何々氏』とさも御大層に本誌前號の編輯餘錄に書かれた自分は、これを見て一人で噴出じもし又聊か迷惑せずにも居られなかつた。しかし、同じ間違つた噂でも人々の常習者だとか、旭町あたりの粹な生き物を飼つて居ると云ふやうな景氣の好い噂さを立てられたよりも名譽を毀損はすまい、條例による取消文を申込んだり、編輯局へ怒鳴り込む程の問題でもあるまい。

◇

俳句といへば、もう二十年も昔のことだ、一寸匂ひを嗅いだことがあつたゞけ、つい二三年前迄京城にゐて救世軍大尉として精神界に奮鬪して居る石島龜次郎氏が、雉子郎と號して東都の俳壇に名を知られて居た時分である、土地のお醫者さんや、學校の先生などゝ盛んに句會を開いたものだ、そして當時自分等が崇拜して居た内藤鳴雪翁や佐藤紅綠氏などに送つて時々選評を乞ひ、點が付いたなどゝ恰度御慶典紀念に正何位でも戴いた人のやうに光榮がつたものだ。

◇

『鶯や橋欄古りし杉木立ち』この頃の新人に見せたら、こりや橋欄ではない句が古いぞ〳〵と嘲けることであらう。

『二夜三夜かるたに重き瞼かな』

互撰してこの句を馬鹿に秀逸かつたのは眼科醫の先生、重き瞼か商賣柄餘程氣に入つたらしかつた。

『白堊點々川溶々として秋晴れぬ』川溶々は秋らしくない春の氣分だなどゝ貶された事も未だ記憶に殘つて居る。

◇

こんな昔話を誰かにした事があつたが、それが間らずも絶妙の域に達しなどゝ飛んだ噂を生んだ事であらう。文章にしても勿論研究した事もなければ、たいした經驗もない。これもやつぱり二十年近くも前の事、上州高崎で絹問屋の小僧さん時代のことであつた、當時商況や相場を掲載して得意先きに配る廣告機關雜誌を發行することが流行り出したものだ。自分で獸句つたやつを活版に刷つて見たくつてたまらなかつた自分は、機關雜誌を發行して大いに販路の擴張に努めることを以て時代に適應した仕事だと大いに主人公を說いたものだ。

◇

主人公も店の仕事に支障のないやうに、餘暇で編輯萬事を、お前が引受けるならと云ふ事で愈々やることになり、早速六法全書を買つて來て發行出願書を內務省へ出す當時の大臣は原敬氏であつた。白面の丁稚が、發行兼編輯人と署名し、原敬殿と內務大臣宛の願書を書いて間もなく許可になつた時、自分は一とがどの新聞社長にでもなつたかのやうな得意の氣持ちになつたもんだ。しかし素より何等の教養もない自分に、殊に繁劇の店務にたづさはつてその餘暇にやる仕事だ、ろくな事が書けやう筈がない。

◇

先づ商況と相場、それに雜纂と題して商賣上の時事問題を書いたり一山いくらの俳句をこて〳〵のせたものだ、或る時は小僧さんの見た店員待遇問題などを書いて主人の忌諱に觸れて危く發行停止を喰はうとしたこともある。

うつかり織物稅撤廢運動をするといふ同業組合の決議を掲載して、政治に亘る記事だと云ふので警察の高等係が迎へに來て、警保局の御傳達だとあつて、署長殿からコキ下ろされ、始末書を取られて恐い思ひをした記憶もある。

◇

隅におけぬといふ文章道の噂の出た原因の由緒來歷は先づこんなものである。

どこかの宴會の席上で或る人からあなたは甞つて操觚界に身をおかれたことがあるそうですが、なぜ〻大變な問ひを受けた事があつたが、それもこう書いて仕舞へば、フ〻〻何のこつたと云はるゝだろう、まあ餘り買被つて貰ひますまい、ちゝぶやの亭主を。呵々。

◈退溪の硯

米倉次郎

朝鮮の碩儒李退溪は先般の御慶典に際して祭祀料下賜の恩命に浴した。本誌寄稿家工藤擔雪氏は平素李氏使用の硯を愛用してゐるので其當日內鮮の詩人數名同氏宅に集まつて此碩學の遺德を偲ぶ所があつたさうな。

京城財界大觀

朝鮮新聞社經濟部長　西本量一

京城雜筆

◇人件費の節約

京城の財界で近頃特に注目すべき現象に各方面に於て行はれつゝある社員の陶汰がある。尤も從來とても弗々行はれては居たが最近は其れが特に著しくなつて來て概して健實なる方面にも波及して居る樣である。

思ふに不景氣の聲を聞くこと、大正九年以來既に六年に垂んとするが、由來日本人は瘠我慢の強い國民で、不景氣になつても仲々不景氣のような顏をせぬ。餘程身が詰つて來ぬと不景氣に處する途を講ぜぬ。然し斯ふ不景氣〳〵が長く續いては瘠我慢も仕切れなくなつて、不景氣に處する途として『儲けるよりも使ふな』といふ樣な方針を樹てゝ經費の節約に取りかゝる、其中で一番に睨まれるのが人件費だ、人件費は一番金高もかさむし、又或程度の伸縮性を有するからだ。最近の例では朝鮮郵船がやつた。殖産銀行も昨年以來の懸案を三月頃解決するらしい。朝鮮銀行も今度の整理案の一項目として人件費の節約を掲げて居るから早晩やるだらう。其他どこの銀行會社を視いて見ても、血腥臭い首切事件のない所は殆んどない。

犧牲となるものに取つては由々敷不祥事であるが、財界が好景氣から不景氣へ、不景氣から惡景氣へと推移するに就ては、之は當然踏まねばならぬプロセスである。ウント節約し、ウント縮少し、ウント整理する必要がある。そして金を使はぬように、物を買はぬように、餘つた金は預けるようにすれば、金と物資の需要が減じ供給が過多となるから金利は低落し、物價も下つて來る道理である。日本が不景氣五年にして尙且つ金利高物價高に苦しみ、此の點に於ても世界の特殊國として遇せられつゝある所以のものは、例の瘠我慢の強い損な國民性から不景氣に處すべき消費節約、勤儉貯蓄をせぬからである。京城財界の人士が最近漸く其の點に氣がついて、經費の節約をやり出したことは、此の見地からして喜ぶべき現象である。

◇此矛盾を奈何

唯茲に別の考へ方として、吾人の心を暗くするものは、不景氣とは言ひながら資本家は種々の方法を講じて投下資本に對する豫定の利潤を收める。之れが爲めには彼等は使用人の糧道まで斷つことを敢て辭せぬのである。一方使用人は被傭權を有せぬ。一片の辭令と一掴みの涙金で拋り出され、其日から彼等の唯一の資本たる智識技能は一錢の報酬をも齎し得ぬ。一方は依然として何割かの配當を續けつゝあるに引き換へ、此方は失業者だ。此れ果して何人の罪か、資本家の罪か。そうとも思はれぬ。被傭者の罪か。勿論ない。自分は前に馘首は當然であると言つた。當然の裏に此の不祥事がある。矛盾も甚だしいではないか。

◇雁首のスゲ替

も一つ京城の財界で特異の現象は茲一箇年の間に主なる銀行會社の殆んどが首腦者を更迭したことだ此の雁首のスゲ替へが、今日の如く流行することは殆んど空前絶後だらう。鮮銀然り、東拓然り、京電然り朝郵然り、一銀然り其他の大小銀行の本支店殆んど然らざるなしだ。之れは一體どうした譯か申合はせたわけでもあるまい、吾人の見る所を以つてすれば表面上別に申合はせた譯ではないが、而も此の間一脈の相通ずる原則があつて支配して居るのだと思はれる。それは斯ふだ。京城は朝鮮に於ける政治經濟の中心地として、又た朝鮮一の大都會として會社企業も相當發達して居るし又内地からも支店を出して居るが、其の實餘り儲かる所ではない其處へ持つて來て此の不景氣だ。益々儲からぬ。資本家は氣が氣でない一つ人を代えてやらせて見ようといふことになるのだ。此の資本家心理が期せずして雁首のスゲ替へを行ふに至つた所以なのである。

然し人の力といふものは大抵似たり寄つたりのものだ。殊に此の不景氣の時代に何人がやつて見たつて大同小異だ、マア代りばへに人件費の節約でもやつて刀の切れ味を試す位が關の山だらう。

◇此高利を奈何

日銀の利下問題が又復擡頭して世論を賑はして居る。日銀は大正八年十一月公定割引率を二錢二厘に引上げて爾來一回の改訂も行はぬ現行各國の公定割引利率を大正九年に比較して見ると。

	大正九年	現行
米國	六、四九	四、五〇
英國	六、七二	四、〇〇
佛國	五、七八	五、〇〇
獨逸	五、〇〇	一〇八、〇〇
墺太利	五、〇〇	九、〇〇
日本	八、〇三	八、〇三

日本は寧ろ獨逸墺太利の如き破産國に近からんとして居る。之を列國に比からんとして居る。之を列

に一割も二割も取られてどうして仕事が出來るか、朝鮮に眞面目な

ある、君の時代に入つて、滿鐵々道局は時勢の推移の然らしむる所

ト整理する必要がある。そして金を使はぬように、物を買はぬよう

京城雜筆

日本は寧ろ獨逸墺太利の如き破產國に近からんとして居る。之を列國並に引下げることは國の體面から言つても當然のことと言はねばならぬ。尤も之には贊否兩論かあつて今が其の時機であるか否かは研究を要する問題であるが、金利高といへば朝鮮も御多分に漏れずいゝ加減高利に苦しめられる方である。中央銀行たる朝鮮銀行の同業者に對する金利が日歩二錢七厘であるから年利にして約一割驅である。庶民金融機關として盛んに利用されて居る質屋の利息は年利にして一圓以下八割四分十圓以下六割、五十圓以下四割八分といふ眼玉の飛び出る樣な高利である。一般事業家が銀行から金を借りるも一つ京城の財界で特異の現象は茲一箇年の間に主なる銀行會社の

墺太利　五、〇〇　九、〇〇
日本　八、〇三　八、〇三

に一割も二割も取られてどうして仕事が出來るか、朝鮮に眞面目な生產業が發達しないのは金利が高いためだ。そして一攫千金的虛業や信託會社のやうな高利貸業が幅を利かすのである。

何故朝鮮は金利が高いかといへば要するに貸す金がないからだ。朝鮮銀行以下市中銀行揃ひも揃つて短期資金を長期に亘つて固定せしめて、資金運轉の自由を有せぬ。運轉資金がないから高利を拂つて預金を吸收する。各銀行の預金爭奪となつて更に高利を負擔する協定利率などは夙くに蹂躙されて纏つた金なら一割でも預かる現狀である。金利引下論は內地よりも寧ろ朝鮮に起らねばならぬ。

朝鮮の鐵道界

朝鮮鐵道協會　岩本撫樽

安藤局長、君は口さがなき京童か『ヌーボー式』と云ふ、『ヌーボー』とは何を意味するかを知らない、しかし『ヌーボー』の語調から來る所の感じは、たしかに君の風貌に接した時起る感じの樣に思はれる若し强いて之に註釋を加へれば、アウトラインか頗る鈍角を以て成立つて居る、荒削りの彫刻を思はしめる、『局長！』と呼べば『オー』と應へる、應待啐啄の間に鈍角的の感じが獲取せられる、之を前久保局長の慇懃叮嚀なる纖細の風姿老練圓滑の曲線的巧緻に比し全然正反對の感がある。前局長時代君は運輸課長の職に在り、陰然として局內に勢力をなした、しかし前局長と君とは其當時餘り呼吸が合はなかつたと、坊間之を傳へる、性格の反する者は時に意見の相違あることを免れぬ、だが性格の相反する者は又、其處に捨て難き兩者の膠著性がある、兩者の意見が相反しても亦　其處に長短相補ふ共存併馳の必要が認められたに相違ない。

久保局長は老巧にして用意周到、親しむべくして近くべからざる深遠さかあつたが、君は此點に關しては頗る粗大朴直にして、而も尙ほ稚氣がある、一寸惡戲でもして見やうと云ふ茶目氣がある、しかしそれは餘りに成熟し切つた老練さよりも、罪がなくて可愛い點である、君の時代に入つて、滿鐵々道局は時勢の推移の然らしむる所とは云へ、一瀉千里を以て多大の改革を行つた、殆んと電光石火矢繼早に英斷が下された、其英斷の中に私は此茶目氣の閃めきの多少を感せずには居られない此茶目氣！人は之を神經過敏の反發的態度だと云ふ固より『ヌーボー』式の裏面に、多少神經過敏の反對性格が潛んで居り、粗大の裏面に細心なる敏感の包藏されて居ることも、或は爭はれない事實かも知れないが、しかしそれが大なる惡意や反感から根强く萌されたものでなくして、其處に輕い諧謔の戲弄が潛んで居るものと解するのである、故に若し之に觸れた場合、憤怒怨嗟と云ふ樣な純粹な痛恨の感を打消して淺い快感が其上を掩ふ、苦笑それは實に苦笑を以て之に對するより外に仕方がない。

茶目氣と云へば語弊がある、事をなすに茶目氣なる故を以て之を怨ずる譯に行かないかも知れぬ、しかし其茶目氣は茶目らんが爲の茶目でなくして、其性格の一端が飾り氣なく現はれたものである、細心誠慮些末も尙ほ怨せにしない者がある、一事をなせば一事に執著して何等の餘裕かない、戰々競々として誤りなきを期するも、人生行路の錯雜は、凡そ人爲の悉くを擧けて其絕對性を失はしむる、昨是今非の中に在りて、尙ほ且つ稚氣滿々たる性格の餘裕は、畢竟凡庸の企及する所でない、古來英雄の心事、尙ほ此の稚氣があつた吾人は其稚氣の結果は嚴格なる批判を加ふる以前に之に對し淡い快感の閃めきを感せずには居られない

京城雜筆

朝郵の新局面

新專務恩田銅吉君

京城日日新聞社理事　別府八百吉

近頃目ざましい改革を社業の上に加へたのは朝鮮郵船會社であらう創業十二年來殆ど行はれなかつた老朽無能社員の陶汰――それが會社を知る人々を驚かし新專務の恩田君は中々やるなと思はせたが引續き會社は重きを置いた傭船主義を所有船主義に改め鮮明な旗色で進まんとしてゐる同社の取締役會長原田老はよく云ふと練達堪能の傑物、わるく云へば海千山千の喰へぬおやぢさんである、六七年前日本郵船の專務になつた時、朝郵の社長は辭して取締役會長と責任を輕くした、その後日本郵船の方は關係を絶つてゐるけれど朝郵の會長は依然として續ゐてゐる、而して前專務の松崎時勉君の在任中は德川家康が駿府にあり大御所として秀忠將軍の執政は大小となく干渉したやうにすべての書類は東京廻送を命じ、松崎專務に手も足も出させなかつた、然るに昨秋恩田銅吉君の專務就任と共に原田老の朝郵に及ぼす影はどうやら俄にうすらいだ、これは松崎君が案外見かけ倒しの凡倉であつたためか又は恩田君は原田老の干渉は受けても巧みにその呼吸を知つて之れを操つてゐるのかは知らぬが、兎に角朝郵は原田松崎時代より、恩田時代に移つたやうだ。

恩田君は上海の日本郵船支店長をしてゐた男だ、もう二三年も使用人で我慢してゐれば日郵の專務位に行ける人だらう、それが朝郵の專務に納まらねばならなくなつたから君としては損な役廻りである、先日君の話しに自分は上海の日郵支店長をしてゐたから地位としては會社でも屈指の方だが、然し自分の社内の待遇はまだ右翼を大分もつてゐる自分はこれまでいつも待遇以上の仕事をさせらるゝ慣例とでもいふかがあつたと云ふてゐた、或は餘りこれまで好い役まわりばかりしてゐたため今度は有り難くない朝郵入りを餘儀なくされたのかも知れぬ、朝郵に君の入つたのは何等の豫備交渉もなく上海から東京に呼び出されたから行つて見ると、すぐ朝鮮に行つて呉れ大株主の日本郵船として朝鮮郵船の專務に推薦すると云ふアンバイ式で極めて唐突に京城に來たものらしい君は色の黑い咽喉部にナマヅのあとのあつたりして風采は堂々を缺ゐでゐるが、精悍で尖鋭で五分のスキもない凛々しい面構への男である、何にしても仕事師に相違ない、其の向の口添へがあつたとしても今日の鮮銀から三百萬圓を出させる事にし、二千噸級の船を八五隻も買つて傭船の全部を返還しやうといふ新計劃を樹てゝゐる、傭船料と船價が今後どう動く、海運界の推移如何、それが君の今回の英斷的處置の利害を後日に示すであらうが、高い傭船料を拂つて不經濟な航海を續けるより金利を出しても社船を殖しそれに能率を上げさせやうといふのが君の主義で少なくも現在はそれがよいらしい。

今日の所朝鮮郵船としては二萬五千噸から三萬噸の船を動かしつつあるが近く五萬噸位に擴大する方針とも聞く、その上海航路新開の如きは新方針の一尖端であらうか朝鮮海運界のためにシツカリ活動を望む。

◈雜筆と讀者

一記者

本誌發行以來僅かに三號であるが其前途の方針に關して注意を與へらるゝ向少なからず、之を大別すると左の如くである。

一、永樂町人にもつと澤山書いて貰いたいとの希望の者三十三通

二、モット頁を增加して各人の執筆の長さを今少し增加せられたしとの希望、十二通

三、現在の頁數を以てモット比較的廣汎なる範圍より執筆者を選ばれたしとの希望、二通

四、現在の調子にて進まれたし、との者、並びに永樂町人一人雜誌たらしめたしとの者、各一通である。

五、活動寫眞、演藝、花柳界等に關する記事も記載せられたしとの希望のもの一通、

右の内匿名三通にて他は悉く住所氏名を明記してあり、眞面目な讀者に相違なきを信ずるも、本誌創刊に際しての本來の趣旨が、正月號卷頭松本武正氏（本社のあるじ永樂町人本名）聲明の如くなるを以て今俄に讀者の希望に添ひ難きを遺憾とする。但し勿論讀者界希望の存ずる所に就ては絶へず注意を懈らず、出來得る限り、其の注文に應ずる所あらん。

私の趣味

夜の雨に寢床を出づるの熱心あり

に行ける人だらう、それが朝鄙の事務に納まらねばならなくなつた

京城雜筆

私の趣味

藤井寛太郎

渡鮮以來足掛二十一年、始めの四五年間は大阪、熊本と群山仁川の商店を監督する爲、毎年四五回此地方を巡回するので可なり多忙であつたが、現今に比べるとまだ餘程餘裕があつて時には下手な狂句も浮かんだが、渡鮮早々より其急務を痛感した水利事業が明治四十二年全州平野の大旱魃で農民の悲慘なる實情を見て自分の天より下されたる一大使命である如く考へて此事業に著手してからは眞に十年一日の如く苦心奮鬪、寸刻の閑もなき激忙生活を繼續し來つたので、私の會社には日曜も祭日も盆も正月もないと言ふ有樣で多くの部下にも常に氣の毒に堪へぬ程である。隨て私程無趣味なものは無いのであるが元來私は十歳位の時より當時大阪中で僅か居留地に二艘しかなかつた『バッテラ』（今のボート）を借りて天保山沖に漕ぎ出すとか、是も數へる程もなかつた木製の自轉車を乘り廻すとか言ふ風の大底の道樂は皆好まで、母が自慢の『水音の耳に冷たし後の月』の吟者であつた關係上、發句も滿足知らぬでも無い。だが明治四十三年臨益水利組合の工事を始めてからは明けても暮れても、水利と開墾農事の改良に沒頭し、而かも四商店の經營で、業務以外の趣味を樂む餘裕は全然なくなつたのである。然るに天は公平で此激忙中に到底他に比することの出來ぬ一大趣味が生れて來た。夫れは自分の業務其物である。

今日世人が能だ、謠だ、溫泉だ、別莊だと樂む代りに、寒風肌を裂く鴨綠江口に、數里の堤防を築きて波濤と鬪ひ、拾里の河を穿ちて濯漑を通じ、炎熱金を溶かす全州平野に周廻十里の貯水池を造り、高さ百尺の一大偃堤より落下する飛瀑の壯觀は、水路を流るゝ十八里にして一萬町歩の驅田變じて美田となり、或は弓矯の夢の跡なる鐵原平原、溶岩累々たりし黑金の原今や變じて黃金の野となる。最早是程の愉快は他の何物よりも得難いのである。

世人は一鉢の盆栽を樂む爲め、深夜の雨に寢床を出づるの熱心あり現今の私として是程大きな盆栽の手入れに日曜や祭日を廢するは、寧ろ當然の事とも言へる。

世人は其道樂の爲めに深夜寢床を出づる者多きも、何でもない日常の業務を苦痛とするのは、實に其人の不幸で氣の毒千萬である。若し私の樣に世を擧げて其業務を樂しんだならば、啻に生活難の聲を滅じ得らるゝのみならず、生產の能率は大に揚り世人の幸福も增す事であらう。

私は我國歩の艱難を思ふと共に常に世人が其業を趣味とする事を祈つて止まぬものである。

が君の主義で少なくも現在はそれがよいらしい。

を慚らず、出來得る限り、其の注文に應ずる所あらん。

◈朝鮮人の民族性

大垣丈夫氏談

『京城の昔話しを俺にしろつて、暗闇の恥ぢを今更明るみに持ち出す必要もあるまいがの』と大垣翁は眞白になつた長髯を扱きながら云つた。『それよりも私は朝鮮の國民性に關して從來研究し考察したことゞもを談つて見たい』と前提して語り出されたのが即ち左記のものである。

◇

一口に言ふと朝鮮民族の通有性はまことに物のあきらめがよいのじや。一度此の事は成就すると見れば驚くべき勇猛さを以て突進するのであるが、所詮駄目と見るや最早や何の執著をも殘さぬ。進むも急、退くも亦急と謂ふべしぢや。だから昔時、死刑囚の切られる時の如きも、殊に其の極端な適例を示してゐた。一度び罪の宣告を受くるや首枷手枷足枷の姿を以て其罪狀を示し街路を曳き廻され四辻に曝され而して後北門に於て殺されるに際しては、頗る鈍刀を以て鋸引きに首を切られるのだが、何等泣き叫ぶでもなく首を差し出し神色自若として刑に就くのが彼等の全部である。日本民族も古來英雄の士は死に就くこと歸するが如しなど云つたものだが、それは少數豪傑の士であるに過ぎぬ。かの幸德傳次郎の如きですらも泣いたといふではないか。又高らかに詩歌などを吟唱してみたり、躍るが如く刑に就く如き者も、それらは從容たるものでなく一種の昂奮狀態に陷つたものが多いのだ。然るに朝鮮民族に至つては鋸引きにされる首を引込めやうともせずに眞に死を待つのは、即ちこの民族の特有性に因由するのである。けれども、先方を弱しと見縊り、乘ずべしと考へたら最後、飽くまで獰猛果敢に突進する、然しこの際、數百人の徒黨の中、二名を殺したら、他は逃亡するのぢや。

【一五】

京城雜筆

株界雜筆

京城現物取引市場　中村郁一

◎お米が先づ圓に三升と云ふ平均相場とすれば一人一箇月の食糧一斗米平均として四人家内ならば四斗の十三圓三十三錢一ヶ年百六十餘圓の米代が要する譯である、仁取現時の相場が百圓として十株即ち一千圓を投じて買ひ置けば一株十五圓の配當で十株の百五十圓であるから一ヶ年に一家族の要する米代は永久に之から生れ出る譯である、そして此の株價は時代の進展、經濟界の膨脹に依つてズンズン上に行くので一千圓の資産はやがて一千五百圓となり一千八百圓となる時代がある。

◎假に一千圓を何年何十年間貯金してゐても矢張り元金は元の一千圓に變らない……否變りの無い許りではない經濟界の膨脹、通貨の增大に依て貨幣價格が下落するので預けた當時の一千圓は爾後の六百圓七百圓の價値に減ずる譯合である、即ち一千圓は等しく一千圓の額面ながら其の價値が下落して、六七百圓の效能しか無いと云ふことに決著する、換言すれば預けた當時の元金一千圓は數年後十數年後には元金一千五六百圓となり二千圓とならねば勘定があはぬ勘くも元金が一千五六百圓以上となるべき性質の利殖法を講せねばならぬ。

◎此の點から云へば不動産に投資するのも確に一つの方法である、が併し不動産投資は多少煩雜な手續や收益に面倒な事や又處分の場合に換價が迅速を缺く等の點があるが株に投資するのは全く此の憂がないので吾人は之を推奬し度いと思ふ。

◎株に投資するのを危險と云へば何でも危險ならざるものは無い、不動産でも土地には豐凶旱害水災の難があり、家屋に消耗倒壞火難等の憂がある、斯く詮じ來れば何一つとして心配の種ならぬはない安全第一としてゐる郵便貯金も公債も政府の財政一つで危險を絶對に免れることは出來ない、況して銀行預金に於てをやである、銀行が破産したら元も子も亡くなる事例は夥しいのである。

◎吾輩が前年業務上體驗した實例だが市内の某料亭のKなる仲居が大正九年の株界暴落時に或る知合のお客の酒席に出た事があつた、其の時お客は切りと仲居のKに株の買入れを奬めてKが虎の子の樣に大事に貯めてゐる永年辛苦して貰つたポチの臍繰金大枚三千金と云ふものを『若し損があつたらお客が辨償する』と云ふ保證附で仁取を二十株丈け買つて持たせ處が一年有餘の大正十一年一月に仁取增資問題で株價はトン〳〵拍子の絶項、最高値一株子孕み二百九十何圓と云ふ時代に突進したのである、其の時Kは丁度吾輩の會社に信託に來て右の次第を申述べ『當時世話して呉れたお客さんが内地に引上げて仕舞はれたので誰に相談仕樣もないから御社で信託預りを仕て都合よく取計つては頂けまいか』と云ふ相談であつた。吾輩は一寸考へた『今が人氣の絶頂ではあるまいか一旦處分して安値を拾つて戻した方が得だらう』とそこで其の意味で賣却をすゝめて五千八百圓で處分させたが買値の約倍額になつたのでKはほく〳〵喜んだ其の後又元の二十株丈けを增資後七月に二千七百圓で買戻させたのである、僅か二年の間に三千一百圓丸々と儲けて之を資本に一寸した割烹店〇〇〇を出してゐる、そして仁取の配當年三割として毎年三百圓宛のお米代とお菜代は確實に收入して安穩に衣食の心配がいらないのである、是等は幸運の實例ではあるがお客の見立も善かつたし吾輩の見切方を勸めたのも上出來であつたと思ふ。

◎一體株とはそんなものである、十分に愼重に見込を付けて置けば決して間違ふべき筋のものではない、間違ふと云ふのは一言に毒せば愼重を缺いで慾張つたり短期間の投機思惑をやつて冷靜を缺くからである。

◎夫で歐米の先進國の株式思想の發達した處では株式投資は絶對に安全だと云つて身に餘財があれば之に投資すると云ふ習俗だとの話萬更僞言ではあるまい、朝鮮に株式思想が普及して堅實な資産として民衆化する時代は何時の事やら……ヨク〳〵研究して掛つたならば恰好の財産利殖法たることは間違ひないと思ふ。

◈科學者と天理教

山上直吉

朝鮮の炭鑛王蔵生晋波氏の令弟同姓昇氏は、電氣事攻の新進の工學士であるが、天理教の熱心な信者で、近く令兄の炭鑛の事業が始まつた曉は、同教の教理を以て最も新しき勞資協調に努力するであらうとの噂がある。

【一六】

物語作家

京城日報社　酉寸　嶺　藏

京城雜筆

物語作家

京城日報社　西村滿藏

『貢太郎が來て居るが會つて見ないか』――或る日の午後、編輯局の卓上電話が斯う怒鳴つた。聲の主は同僚のK君、貢太郎と云ふのは物語作家として可成有名な田中貢太郎のことである。

『面白い、會つて見やう。何處に居るんだい』と訊くと『今、京城食堂に來て居る』とのこと、早速食堂に行つて見ると、近眼の奥田鯨洋君が逸早く見付けて、此處だ〳〵と麾く。一座は都合四人ばかり貢太郎さんは、鯨洋君の右隣に陣取つて、盛んに麥酒をあほつて居たらしかつたが、僕の姿を見ると、いきなり立つて來て手を握る。もう大分廻つて居るらしい。

『やあ失敬〳〵、どんな立派な男かと思つたでしやう』

『いや、思つたよりは美男でした』。是が二人の初對面の挨拶である貢太郎さんは一見ゴム人形のやうな感じのする人だ。丁度お盆のやうな圓い顏をして、禿かくしに延ばした髪を後ろに垂れて、その先を頂のところで、恰も豚の尻つぽか何んぞのやうに、キリ〳〵と卷かせて居る。早やく云へば洋服を著た大黑さん、いくら贔負目で見ても、田舍の貧乏牧師以上には踏めぬ風采である。――どんな立派な男かと思つたでしやう――僕は今貢太郎さんが云つたことを其の儘、ネクタイの下で繰返して見た

『鯨洋君は國に居る時からの舊友でね、今度二十年振りで會つて驚いた。細君も以前はホウヨウの美人だつたが、今はもう昔の面影は少しもない。ホウヨウが何時の間にやら、キウヨウになつちよるけんのう』

『一體、ホウヨウだの、キウヨウだのつて、何んのことです』

『ハッハ、、。や是は失敬〳〵實は其の何んですよ、ホウヨウと云ふのは蜂の腰のことだ、それが臼の腰になつたと云ふ譯ですよ。ハッハ、、。』

貢太郎さんは、斯う云つて愉快さうに、僕にコップをさした。ところへ、大垣丈夫老がヌッと顏――ではない例の長い天神髯を現して

『此の人は易者のやうにお見受けするが何んと云ふ御仁かね』と云ふ。貧乏牧師に見られたり、易者に見られたり、貢太郎さんも、また光榮なるかなだ。

貢太郎さんは實によく飲む。痛快に飲む。聞けば初めは、こゝでウヰスキーを飲んで居たが、品切れになつたので止むを得ず、麥酒を飲んで居るのだと云ふ。其の麥酒が、もう一打以上も空になつて居た。

『去年は支那の廣東で、盛んに燒酎を飲んだものだ。靈芝を肴にして、チビリ〳〵甜めるのだ。溶けるやうな醉心地、甲高い胡弓の咽び泣き……支那の情趣は先づ燒酎の香りから湧く』。と云ひながら、又してもコップを口に當てゝ、グッと一息。其の言葉のうちに、貧乏牧師も、ゴム人形も、乃至は易者もすつかり姿を消して、どうやら本當の、物語作家貢太郎さんの面目らしいものがチラと閃いた。

けれども貧乏牧師と云ふとが、先人主になつて居るせゐか、それは恰も幻のやうにはかないものであつた。一瞬の後には貢太郎さんが、又もとの貧乏牧師になつて、ゴム人形や大黑さんと、一緒になつたり離れたりした。貢太郎さんの、本當の姿を見出さうとすればするほど、其の貧乏牧師やゴム人形が余計に活躍する。えゝ、どうでも勝手にしやがれだ。

貢太郎さんは多々益々飲む。それに正比例して、盛んにメートルを上げる。妖怪變化の話、女の話。茹で蛸のやうに眞赤になりながら土佐訛りを搗き交ぜて、次から次へと捲し立てる。此のところ、一個平凡な飲ン平と云つたかたち。是で何處を押せば、あんな優しい潤ひのある、情味に富んだ物語が書けるのだらう、とつく〳〵不思議に思つた位である。

× × ×

私は貢太郎さんの、邪氣のない飲みつ振りと、安物のゴム人形のやうな、粗末な風貌を愛する。

◈街上獨語

河野巳一

釘本氏は、義太夫を續る。ゴ當人は、大分得意らしいが、要するにタイしたものではない▲寧ろ釘本氏の取柄は演說だらう、老人にしては、ぞん外要領を得たことをいふ熊度、口調、論旨もまづくない▲天日君は、唄が上手だと言ふ、生憎我々は、天日君の唄を、拜聽したことがない▲同君のモ一つの得意は、將棋だらう、之れは鳥度差せるといふ評判だ。

京城雜筆

朝鮮新聞社

外交部の人々

京城日報廣告部長　大島勝太郎

一口に外交部とか廣告部とか云つても社に依て其の責任範圍が大分違ふ。朝鮮新聞では廣告部を非常に重視して、例へば花火會とか何とか云つた催し物などする場合でも廣告部が重となつて活動することゝなつてゐるやうに其他何事によらず廣告部の活動を期待してゐる。その廣告部を背負てゐるだけ池畑君（健三郎）は社に取つて實際上なくてはならぬ人である。彼の外交は極めてアッサリしてゐるが、それでいや味がなくて要を得て急所を突いてゐる。

一體外交なるものは、十五分も廿分も座り込んで自家の立場を説明し、手前味噌を力説してからさて用談にかゝらなければならぬやうでは駄目なものだ。京城に六七十人もゐる外交員からみんなこの調子で廿分づゝもやられた日には、第一係りの人は之に應接するだけで全く疲勞困憊してしまう筈であり、從つて外交員から云つても其の効果を收むることはムツカシイ事となる是非之は二言目か三言目に於て刹那の感じに於て用を辨じてしまうやうでなければ、本當の外交者と稱する事は出來まいと思ふ。又外交員自身も左樣に修養する事は最も必要なことだと思ふ。

此意味から觀て、池畑君のやり口も、江藤君の外交ぶりも共鳴を禁じ得ない。江藤君も町の方面で受けがいゝ。

池畑君といふ人は、如何なる場合にでも部下なり後進なりを擁護することを忘れない心懸けのいゝ人である。唄ぐらいはやりさうだが其の方はサッパリ駄目で呑む一方である。

今の細君とも共鳴し合つたお安くない仲だが、一體、池畑君も江藤君も女には頗るモテル方だ近來は一向に艶聞も聞かず、又作りもしまいが、一時はどうしてスバラシイもんだつた。

松原君といふ人は內勤だが、素人芝居などもやれる位な通人ださうだ、江藤君は唄がうまい。

博多訛りの言葉で、義に勇むやうな性格の君は全く見たまゝの人物で、工場の職工を抑へることに於ては君に及ぶ者がないと言ふ評だ。

外に石田、岡崎、福田の諸君がゐるが、其の詳細に就て、よく知らない。

最後に酒の上をきくのですか？

池畑君が最も強く、殆ど酒の上も紊れない賣られない限りは喧嘩も買はない。松原君も強いが、呑むと理に落ちて行くやうに思はれるだけの變化があるやうだ。其他は餘り呑まない人のやうに覺てゐる結局するところ、朝新の外交部は一騎當千の粒揃ひで、更に又池畑君を中心とする點に於て非常な強味があると思ふ。

酒

永樂町人

□

陶淵明の詩には、酒氣がある。彼れは、確に飲んだものらしい。

彼れの酒は、淡々たるものであつたらう、悠々たるものであつたらう。何となれば、彼れの性格がさうである、彼れの人生的態度がさうである。

彼れが、酒杯に沈湎したことは、信ぜられぬことである。

□

老子は、如何なる人物であつたかそれは想像することも出來ない。

莊子は、解脫を說いて居る、厭離を口にして居る。併し、文章彫琢のことを見れば、夫子自體はあまり超脫家であつたとも思はれぬ。

二子の後に出で、眞に二子の旨を實行したものは、陶淵明らしく思はれる。

無執が彼れの信仰であつた。されば、酒に於ても、毫も執する所なかつた事を想像せらるゝのである。

□

李白の酒は、淵明とは大分趣が違ふ。彼れは酒我一體たる時、人生の光明を感じた。酒杯と相別るゝ時、滿幅の寂寞を如何ともすることが出來なかつた。斯くて彼れはアルコールの中に、生涯を發展し一生を醉者として送了した。

□

淵明の酒は、眺むる酒であつた、味ふ酒であつた、樂む酒であつた酒と夫子との間に、適當の距離があつた。アルコールと混和して、べろ〳〵となることは、彼れに於ては少しもなかつた。

□

李白の酒は、左樣に餘裕あるものではない。彼れは目ら飲み、亦た酒をして自己を呑ましめた。酒我一體、その間に分厘の間隔もなかつた。

淵明は、酒の前に自己を發見し、自は酒場自己も、酒も兩ながら忘了した。彼れには天上天下唯我獨尊があるばかしである。

ゐただけに古つはものだけの價値はあるらしい。

吉浦文治君は若手のチャキ〳〵で

池畑君といふ人は、如何なる場合にでも部下なり後進なりを擁護することを忘れない心懸けのいゝ人無執が彼れの信仰であつた。されば、酒に於ても、毫も執する所なかつた事を想像せらるゝのである白は酒場自己も、酒も兩なから忘了した。彼れには天上天下唯我獨尊があるばかしである。

京城雜筆

京城日報社

廣告部の人々

朝鮮新聞外交部長　池畑健三郎

廣告部乃至營業部の活躍如何は時として或る新聞社の運命を決することすらある。にも拘らず一般世間で之を重視しない傾があるのは一體どうしたわけか。

京城にも新聞外交に從事する人々の數は夥しいものであるが、十二三年以上の古顔と云ふと極めて寥々たるもので、僅に現京城日報廣告部長たる大島勝太郎、朝鮮商工新聞營業局長たる岩本虎平の二君及び私の三名に過ぎない。

右は何れも古く朝鮮新聞に在社した連中だが、然らば其頃京城日報に居た人々はと云ふと、現に朝鮮新聞東京支社長たる河野磧平氏其他何れも內地に行つて了つて朝鮮には現在一人も殘つてゐない。

そこで私から觀た京城日報の廣告部員の人物手腕趣味性行等をお話しすることゝしやうなら先づ第一に部長大島君（勝太郎）を鎗玉に擧げねばならぬ。

君は本年三十九歲二三十年前まで京城第一の洋服店たりし資產家淺田洋服店の長男と生れたゞけに資性溫厚、家運衰退後止むなく新聞外交などに從事するに至つたものだが、三つ子の魂何とやらで、今以て飽くまで正直一方で押し通して來てゐる。從つて怪辯を以て先方を威壓するとか、縱橫の魂膽を廻らしてどうするなどゝいふ事は勿論君の爲さゞる所で、度重なるにつれて先方の信用を博し、この信用を以て君は今ゃ京城に於て拔くべからざる地步を占めてゐる。

酒は非常に好きで又無類に强い、京城の新聞界で君以上の者は先づあるまいと思ふ。酒が好きなため一時は可成り花も咲かせ鶯も啼かせたものだが、不思議に君は女に手を出さない、兄さん〳〵などゝ若い妓などから騷がれることは素晴らしいのに拘らず、何かと親切にはしてやるが決して變な要求を持ち出さない、悪友（私なども其一人でしたがね）が如何に誘惑の秘術を盡しても、一向利き目がなかつた。かうして先妻の死去後現在の奥さんを迎へるまで三年間を二人の子を抱へて童貞で送つたとは鳥渡珍らしい方ではあるまいか次には內勤の人として武田直市君がゐる。何しろ八年も同社に勤續し、社內の事情にも明るく廣告の整理については、獨特の手腕があるらしい。外に內勤には小川西本の兩君、外勤には三角、石川、北井、吉浦等の諸君がゐる。

三角勝藏君の外交は極めて足まめな方で、京城案內の如きは殆ど君の獨り舞臺だというとだ。君が蓄財に巧で貸家をもつてる事や、天理敎の信者で月に一回の同敎の安息日に社を缺勤する事などは逸聞として特記の價値があるだらう。

石川庄平君は毎日申報廣告部主任であるが曾て本町で時計店を營んで居たゞけに其外交にはあやも驚引もあつて巧妙な商人式の行き方ださうな。

北井清次郎君は京日には比較的新しいが朝新を振出しに東京大阪兩時事の支局、朝鮮民報　朝鮮時報關門日々などに長く外交をやつてゐただけに古つはものだけの價値はあるらしい。

吉浦文治君は若手のチャキ〳〵で將來を囑望されてゐる。君は中々の粹人で酒は大島君の鬪を摩さんとし、唄は淨瑠璃以外は何でも御座れの達人である。

之を要するに京日廣告部は偉大なる背景を負つた上に先づ多士濟々である。更に新生面を開拓して活躍を試みたなら其前途は洋々たるものがあらう。

◈地方新聞界

杉野欽一

朝鮮內に地方新聞も可なりあるがさて名文家といつた風なものは割合に尠い▲先づ西田元每、長谷川西鮮、松並全北と言つた所であらう▲西田元每は、論策に長じて居る、文章も平明暢達である、無技巧の巧といふ所だ▲松並全北は朝鮮では屈指の書き手だ、之は京城に出て來ても、鳥渡その前に立つ程の名文家はない但し先生大のナマケもので滅多に筆を執らない▲長谷川西鮮は、旅行行樂などに關する文章を書かせると、實に水際立つたものを書く▲朝鮮であれほど美しい筆は、先づ二人とあるまい▲以上三人を地方三筆といつて居る▲此の外に、老ひたりと雖も芥川釜日がある、尠しゴツ〳〵して居るが、拙い方ではない、議論は馬鹿に大きい▲それから木新に長野虎太郎君が居るこれも鳥渡小才の利いたものを書く▲社會部面では、西鮮日々の森火山君、之は地方を通じての才筆だ▲京城に打つて出ても、忽ち名を成す男だと思ふ。

井戸を出た蛙

京城府衛生課長
醫學博士　加藤　賢

唯神のみが知る奇しき運命の糸により釣上げられ、大なる『ショック』と共に陸に放り出された一疋の蛙が漸く生氣付く頃はもう既に京城に來て居つた。夫れから眼をパチクリさせて物珍しそうに周圍を見廻付し始めた。夫れが我輩である。斷つて置くが蛙も自分の事を我輩とも僕とも言ふて居る。妙じやないか僕には蛇に襲はれた程の重大事件も、永らく陸に棲んで居る先輩達には面に水程にも感じぬらしい。これが第一不思議でならぬ。然し今の中こそ奇異とも見ゆれ、其中に隙行く駒に乘せられて京城の肥田子の樣に黄金の道に這入る時はもう奇しとも異なとも思はなくなるに違ひない。今は未だ何と云つても腑に落ちぬ事計りだ。一つ丈け書いて見よう。

いつか陸の蛙と僕の伺僚とが芋虫の一件で五臓見らるゝまで三角な口を一杯擴げて井底に功を爭つた時に、さも達觀した樣な、悟つた樣な、茶化す樣な負惜みの樣な口調で『世の中は理屈ぢや廻はないよ』と如何にも千古不磨の金言でもあるかの如く言ふたのは陸の蛙であつた。井底界には未だ嘗て此の樣な諺はなかつた、寧ろ常に正しい理論の持主程尊敬せられ、道理の前には捕虫の巧者、潜水の上手、乃至謠道の達蛙まで、潔ぎよく前肢を屈し、此機を利用して敬意を表すと言つたものだ。

だが實際理屈と云ふ油だけでは否油愈多ければ世の中は益廻はらないのが陸の上の事實だから仕方がない京城で廻はらない以上日比谷の蛙の間柄も同樣だろうと推斷しても無理はなからう。

以來僕は迚も無用の油ならばとサット理屈を捨てゝ了つて、彼の運轉上手が用ふる油に就いて常に注意を怠らなかつた。そして終に『理屈計りじやない一大部分は情だつ！』と蛇の顎を遁れた時程に此大發見を喜んだ。試みに少し計りを注して見たア、廻はるワ〳〵させばさす程ア、廻る〳〵。此事あつて以來萬事を觀るに、蛙の世には殆んど情しかないと云つてもよい位だと信ずる樣になつた。一體情から出た理屈は理論としてはナッテ居らぬから其急所を衝く位の方策は幾等もあるが、コ、ダと思つて新發見の油をさして居ると不思議な事には何時の間にやら事物が大體自分の思ふ通りになつて來る。公務もこれだ、私用もそれだ丸で知らぬが政治なんて云ふものも大部分こうではなかろうか。

斯くして陸に上がつた時の強きプアーストインプレスションが次第〳〵に薄らいで行く。唯遣る瀨ないのが僕の頭の大部分を長年月占領し、源深く根ざした理知である可愛想なのは理知である。

そこで近頃こんな事を考へた、即ち情理の性質及び其混合の割合が其蛙の蛙格となり、個性となり、從つて泳ぎ方も蛙によりて違つて來るのではなかろうか？。

一生懸命云ふては見たものゝ、陸の蛙がフンと鼻の尖きで笑ひよるのが殘念だ。

◇世界の滿員

工藤武城氏談

日本の人口は聖武天皇の神龜元年に八百五十萬、それから德川家康が征夷大將軍に任じた慶長八年までの八百八十年間に僅に二千五百萬に增加したばかりだ。

その慶長八年から慶喜が大政を奉還した慶應三年までの二百六十五年の間は天下擧つて產兒制限を實行したゝめ人口は少しも增加の跡を見ず、それが明治大帝の治世五十年間に於ては驚くべきことには一躍三千五百萬を增し五千六百萬となつた。

之を世界各國の例に見るに、二三民族の除外例はあるも其他は多少なりとも增加の統計を示して居るそこで、現在のまゝの生活を基準として世界全土にどれだけの人口を包容し得るかと云ふに、現在世界の人口は十七億であるが、之を人種別に考察して計算してみると亞米利加人のやうな贅澤な人種だと廿三億で滿員となり、之よりも質素なる獨逸人だと五十六億更に最も簡易な生活に甘んずる日本人ならば二百二十四億までを包容し得る勘定となる。依て之等の中間を採つて百億で世界が滿員になるものとし、現在の十七億から百億に達するまでの年數を計算するに現在の人口繁殖率を以てすると二百二十三年かゝることゝなる。

今之を、現在を基點として逆に溯ると、元錄十四年即ち大石良雄が吉良邸打入の年から今年即ち大正十三年までの年數に於て世界は滿員になつてしまうのである。

寺田壽夫氏

初對面印象記

てみた。何となれば彼の智識によれば新聞記者の字典には謙遜という文字は無かつた筈だから。

しかし寺田君がまさしくさう云

油愈多ければ世の中は益廻はらないのが陸の上の事實だから仕方がない京城で廻はらない以上日比谷

そこで、現在のまゝの生活を基準として世界全土にどれだけの人口を包容し得るかと云ふに、現在世

京城雜筆

寺田壽夫氏

初對面印象記

下村生

――新聞記者といふ階級の人々は少くも總督閣下の次くらゐに豪い人々に相違ない。何となれば彼等は鼻糞ほどの學問があつて社會の實情とやらんに通じ、職務のためには要路の大官とでも、大會社の重役とでも、其他如何なる高名な人達とも、極めて無遠慮に談話を交はすから。又火事や泥棒や、其他世間の人々の厭やがるもろ〳〵の出來事に對してはお巡りさん以上の危險をも冒して吾等のために働いてくれるんだから、彼等は確に世人の尊敬に價すべき人種に相違ない。

併しながら何といふ彼等の横柄さだ、何といふ彼等の悪辣さだ、見ろ彼等の過半は電車に乘つてもパスは見せないでパスと口中に唱へ罷り違へば車掌を毆り飛ばす連中なんだ、面識もない料亭に飛びこんでサンザ飲食ひした揚句、『勘定は社に取りに來い』と名刺を突き付ける手合なんだ。さうして又初對面の時の彼等の何といふ印象の悪さだ、人の云ふ言葉は鼻の先であしらつて其癖狙ふやうに人心の機微に耳を澄ましてゐる彼等の悪癖は職業人としての一面を餘りに多く擴大したがるにある、さうして又餘りに常に特權を利用し過ぎるにある。禍なる哉愚劣なる者よ斯くして彼等は特權利用の快感に痲痺し、若しくは之に眩惑して人間として他に大切な一面あることを忘じ盡くした。――

さう思つてゐる一個の存在を假りに彼と呼ばう。彼は事ほど然樣に滿鮮の記者先生に對しては呪ひと恐れとを感じてゐたのである。尤も彼が斯く感じた對照たるや、本物の記者ではなくして、何かの際に彼の錯覺に映じたところの擬ひ物であつたかも知れない。けれども兎に角彼は彼自身の信ずるところの記者なる幻覺に對しては極度の尊敬と同時に又、絶對の憎悪を感じてゐたのである。

ところが、その彼が或時、現時京城の新聞界に旭日の勢を示しつゝあるところの京城日々新聞社に同社編輯局長たる寺田壽夫君を訪問したのである。彼は例に依つて此恐るべき人種の一人に逢ふ時の苦痛を新にしつゝ、多くの不良少年に圍まれた善良なる處女の如く戰々兢々として、さながら畏怖それ自身の如き態度を以て、この寺田君に臨んだのであつた。

彼は呉服屋の番頭の如くに叩頭百拜の後『手前は京城雜筆社の者でございます、是非一つ先生の玉稿を頂戴仕りたいものでーー』と恐る恐るやつてみた。

然るに寺田君の返事なるものは彼の從來の所信を、或は幻覺を根底から破壞して了つたのである。『雜誌には餘り書いたことがないので、うまくいくかどうか、兎に角やつてみませう』かう寺田君は謙虚な、丁寧な語調で言つたのである。その寺田君のギリシヤ時代の彫像のやうな謹嚴で詩人風な横顔を見ながら彼は自分の耳を疑つてみた。何となれば彼の智識によれば新聞記者の字典には謙遜といふ文字は無かつた筈だから。

しかし寺田君がまさしくさう云つたに相違ないことは、其刹那以後に於ける寺田君の態度と表情とが充分に明確に之を證明してゐたのでも察せられた。

そこで彼はかう思つたのであるーー寺田君は所謂記者的大先生ではなかつた。然し下等な記者根性を超越した一個の至人である――と。

◈民間の快辯

川上淳吉

高橋章之助氏は京城民間に於ける辯論の雄であるが、明大在學中已に一廉の辯者として聞へ、卒業後主として光明寺氏は西園寺公等と初期の佛國留學生であつたが、其辯說は最も多くクレマンソーの型を取つたものである。だから高橋氏の演說もクレマンソーの型から出てゐると謂へやう。氏は之に加ふるに日蓮主義的の火の如き確信を以て折伏的熱辯を最も得意とする▲それがため時としては、前辯士の毀撃に油が乘り過ぎて、自分の本論を示すことを忘れ完膚なきまでヤツツケル方が急になり、餘り烈し過ぎるとの注意を受けることが多いと云ふことだ。氏は京城に於ては松本正寛、田中半四郎、大村百藏等の諸氏を辯者として推してゐる▲尙ほ高橋氏の言はれた外に辯護士平山利治氏は新進氣鋭の辯者として著名なものだが、氏の辯舌は才氣煥發の理性から湧き出る種類のもので內容の鉄鎖と語句の優麗とに於て推されてゐる。

京城雜筆

保險屋さんの話

河西青蒼

表の開く氣配がしたので、私は小供を抱えたまゝ直ぐに立つて行つてみました。何時ものやうに笑顏のいゝ小作りな伊藤さんでした。『ヤアようこそ』と、暖爐の傍へ招じました。

伊藤さんはツイ先達まで私と同じ社に居たのでしたが、去年の暮に罷めて今は保險屋さんでした。なると直ぐ社へやつて來て、此のごろ流行の家財保險といふのに私を引込みました。月二圓づつ掛けて若し燒けたら千五百圓お拂ひするし、若し燒けなかつたら一年先きで十二圓だけお戻しすると恁ふいふ話でした。如何にも燒けて千五百圓頂戴するのは先づいゝとして、燒けなかつた時、會社へ半分たゞ獻上するのは損ですねえと、私が尻込みすると、ソ、それが保險料ぢやあ有りませんかと、伊藤さんは笑ひながら然し言下に反駁したのでした。

歸つて妻に、今日は保險に入つて來たよと、報告すると、あなたもお父さんになられましたねえと感心して居る模樣でした。

その伊藤さんの來訪ですから、私も元氣よくもてなしました。

『大きくなられたですねえ』と話は先づ小供のことからほぐれて行きました。伊藤さんのいふのには、僕の所でも三度目のお產がありましたが、小供の頸に胞衣が捲きついて居たものですから、難產で心配しました。その上に丁度折も惡く、その夜は五ヶ所にも火事がありましたので、大いに面喰ひました。えゝと、永樂町に花園町に龍山に、それから苑南洞か何處かにも無闇に火事のあつた晩でした。此の冬はまつたく火事が多かつたですねえ。然し、もう火事の季節は過ぎて仕舞ひました。處で火災保險の方は、謂はばもう時遲ひになつて來ましたから、僕も實は方面を變へて、此のごろでは、生命保險の方もやつて居るのですよと、流石にとても巧みに話の筋をトントン運びながら、折鞄の中から例の保險案內を取り出して、『是ですよ』と擴げました。私はハハーンと點頭きました。そこでまた伊藤さんのいふのには『僕の會社獨特の聯合保險にお入りなさい。二人保險とも云いますがねえ是なんです』と、また小さなパンフレットを持ち出しました。今度は私はオヤオヤと思ひました。

一體私は何となく此の保險といふものが好きではありませんでした。家財保險を勸められた時も、實はあまり進まなかつたのでしたが、何と云つても月に僅か二圓でしかも一年限りで勝負がつくといふ話だつたものですから、左程聽刼にも思はず、ツイ釣りこまれたのでした。然し生命保險となると左樣は行きません。一年に三四十圓は何うしても拂込まねばならぬ上に、千圓受取れるのが先づ二十年先きです。妻に云はせると『あなたもまだほんとうのお父さんにはなれませんねえ』であるかも知れませんが、然しそれにしても如何にも氣の長すぎる話です。

今の私は三十ですが、二十年以前は十の鼻垂れ小僧だつたことになります。勿論まだ故鄕で母親にあまえて居た頃ですし、第二日露戰爭だつて漸く濟んだ頃です。世の中がそれから後、何んなに變つたかいふまでもありません。私も勿論亦大變りで、今では恁ふして朝鮮を彷徨つて居る始末です。とすると、千圓受取る筈の二十年後の私は一體何ういふ事になりませう。先づ順調に行つて五十になります。然し今から明瞭に判つて居る點は、唯それだけです。保險料だつて、そんな長い間滿足に掛けて行けるものか何うか、一切判つた話ではありません。

こと此處に至つては、もう伊藤さんの生命保險の話も一向に興味が湧きません。私はハ、アと上の空で聞き流しながら半分は先づ無意識に、今出された所謂聯合保險のすゝめといふパンフレットを取上げて見ました。

處が私はその表の繪にスッカリ引込まれて仕舞ひました。外でもありません。ミレーの晚鐘の縮寫でした。私の好きな畫でした。そして其の下に橫に二人保險と書き又其の下に今度は縱に聯合保險のすゝめと印刷してありました。

私の氣がフッと變つて來ましたと云ふのは、保險にせよ商品にせよ、今の世の中の廣告術の巧みさに引つけられて仕舞つたのでした如何にも氣が利いて居るではありませんか。誰だつて、それと見たら徒には見すごさない此泰西の名畫を標的とし、その下に二人保險だとか、聯合保險だとかいふ文字を並べて置けば鳥渡內容を見たくなります。

私も結局中を開けて見ました。

××保險株式會社は澁澤子爵及第一銀行頭取佐々木勇之助氏が親しく御指導監督の任に當られる會社でございます……故に本社は御加入者がほんとに安心できる會社

伊藤さんは伊藤さんで、またこの利殖保險の話の方へ移つて熱心

相當愛讀者?を持つて居ることと思ひます。

京城雜筆

しく御指導監督の任に當られる會社でございます……故に本社は御加入者がほんとに安心できる會社だと信じますと、先づ是が劈頭の頁に現はれた文字であります。然し是などは丁度壽藥の廣告に何々醫學博士御方劑などとあるのと一般、もう舊手で、羊頭狗肉としか受取れません。

次の頁へ行つて、是も極く平凡です。面白いのが第三頁です。

思ひ思はるゝお二方、互に力となさるお二方、御親子御夫婦御兄弟御親友御主從、あなた方の御愛情を聯合保險で御堅め遊ばせ、と

恁ふまづ大きく書いて下へ六號で小く、我社の聯合保險は我社獨特の最も進歩せる保險でありまして

お二人を一人と見て御契約致しまして保險金はお二人のどちらへでも御支拂致しますから、どちらの方に御不幸がございましても、他のお一人の方が御受取になることが出來ます。……が、此保險の妙味は金錢上の利益計りよりは、寧ろ精神上の大利益にあるのでございます、と申しますのは此聯合保險は御二人を結びますので、自然お二人の間に親しい情味を起させ永久の平和と幸福を齎すからでございます、とあります。

一見頗る平凡の樣ですが、玩味して見ますと、是が、人の親や妻の心を妙に引くから妙です。矢張り道によつて賢しで、巧みに機微を捕へて居ります。

伊藤さんの保險の話がまた面白くなり出しました。伊藤さんは、今度は利殖保險のすゝめといふのを出しました。是の表紙には鷄卵を五つ皿に盛つた寫眞が出て居ます。偖この卵の意味がよく判りかねます。

伊藤さんは伊藤さんで、またこの利殖保險の話の方へ移つて熱心なことです。此の保險は始めの五ヶ年間は掛けるだけで、假りに死んでも千圓取れませんが、其の代り十五年滿期の配當金だけでも五百圓近くあります。約言千圓の外に五百圓も取れるのです。是が二十年となり三十年となると配當金も激增します。それだから……えつ。この表紙ですか。卵ですねえサア何の意味なのでせう。つまり卵が鷄になつて又卵を生むやうに此の利殖保險も增へると云ふ意味ぢやあ無いでせうか……

折角利殖保險の効能を說明して居た伊藤さんは、恁んな具合に、私の唐突な質問に遮ぎられて、シドロモドロになつて仕舞ひましたが、私はまた私で、廣告術と云つた風な横道に外れて行つて仕舞ひました。

妻がそこへ配達された新聞を持て來ましたので、私は我慢しきれないで、日ころ見たこともない廣告を見るべく、ザワ〳〵と新聞を擴げたり疊んだりして、伊藤さんの話は一切上の空になつて仕舞ひました。

まづ朝鮮新聞に出て居る神經衰弱特効壽農學博士鈴木梅太郎先生發見ユーキリンといふのが目につきました。是などは明らかに『勇氣禀』です。神經衰弱などは一目見ただけで逃げ出す筈です。獨逸殺鼠劑安全メッソ、是は平凡です『滅鼠』に違ひありますまひ、京城日報を見ますと、衞生口錠カオールとあります、是も前同斷、京城日日新聞を見ますと、ミツワ家庭常識文庫十三の二があります。この廣告文庫は、人氣俳優を巧みに按配して、挿繪も趣きがあり、相當愛讀者?を持つて居ることと思ひます。

此の他に鳥渡見當りません。例の春情本もどきの、變な廣告は問題外で、現に內地の大新聞では、恁ふした如何はしいものは一切受付ぬ社もあるそうです。

私は遂に立ち上がつて、次の間から數日前の古新聞を持ち出し、ドカリと置いて擴げ出しました。流石の伊藤さんも、是には僻易したものと見えまして、保險の話を切り上げて仕舞ひました。然し尙私は廣告あさりを止めませんでした。矢張り一番引つけられるのは新刊書籍雜誌の廣告です。續いて巧みなのは化粧品類の廣告です。人を食つたものには鼻耳內服壽チクノール、防臭劑マクトキエール等が目につきました。總じて朝鮮の廣告は意匠も文句も狙ひ處もすべて、內地のそれに比して、雲泥の差があります。

伊藤さんは遂に閉口して仕舞ひました。結局『お子樣の將來のために、是非壞樣の御一讀を』といふ保險總論のやうなパンフレットを殘して置いて、一種の性格破產者である私に、一先づ見切りをつけて立ちあがりました。

『まあも少し待つて下さい。一年に三四十圓の貯金でも出來るやうになつたら、必つと伊藤さん、あなたの方の保險へ入ります』と私は心持を打明けて、別れました夜はもう十時を過ぎて居ました。出產以來今も尙床から起き上がれないといふ伊藤さんの奧さんは、どんなにか、伊藤さんの歸りを待ち佗びて居たことでせう。

私は表を閉めました。

私も結局中を開けて見ました。

××保險株式會社は澁澤子爵及第一銀行頭取佐々木勇之助氏が親

で心配しました。その日に丁度

も惡く、その夜は五ヶ所にも火事がありましたので、大いに面喰ひました。えゝと、永樂町に花園町

何にも氣の長すぎる話です。

今の私は三十ですが、二十年以前は十の鼻垂れ小僧だつたことに

京城雜筆

新しき道

高木背水

私は豫ねてから此往十里の驛前に立派な道路があつたなら京元線へ出入の貨物の運搬が樂になるだろうと泥濘に脚を沒する馬車馬にさへ同情の涙を禁じ得なかつたが歸朝以來二十箇月病苦に惱み續けながらも漸く松葉杖を兩手にして病軀を支へながら何とかして此驛前の正面道路を開設したいと窃に計畫を樹てました。

幸に四月から病氣も快癒し別府から此アトリエに歸つて來ると東京方面から拙作所望もあり創作に忙しい毎日を暮らしながら、秋になつたら老いた父への老軀と此道路開設だけ是が非でも實行し得ると勇んで盛夏は醫師の勸で滿州老虎灘に暑を避けつゝ海邊のスケッチを試みてゐました。丁度八月も終ろうとする或る日悲しい老父の訃報が私の耳朶を打つたのです。父は七十六歳の老體であるので永い命ではないと常に覺悟はしてゐたものゝ訃報に接した私の悲は申す迄もありませんでした。父は鎌島家の三男に生れ高木家へ養子に來たのですが維新に際しては官軍に鐵砲を向けた廉で捕縛され牢獄の苦を嘗めたのですが一命だけ取止めて爾後官にも仕へず終身閑雲野鶴を友にして日蔭者の生活を送りました。高潔な老父の品性を思ふと兒として恥かしくなります。父は鎌倉の姉の良人である廣津柳浪の別莊で眠るが如く最後の呼吸を引取つたのですが滿州で大作をしてゐる私に親の病氣を知らせてはならぬ、武士は死を恐れはしないと云ふ壯烈な病中の老父の言葉を後で聞いて暗涙に咽ぶのでした。

滿州から東京へ急ぐ列車中で彼の曠古の大震災に遇ひ夢心地で靜岡で下車し米國船グラスゴーで二百十日の風雨を冒し盛に煙を吐いてゐる横濱港から更に軍艦に救はれて辛くも上陸しました。鎌倉へも行けず途中から引返し殆んど飲まず喰はずの二晝夜の歩行で漸く東京へ著くと我が家は灰燼に化して無一物、十六日までは乞食姿で父の遺骨を預けたりして漂浪の旅を續け命辛々京城に歸つて來ました老父を喪つた私は一念道路開鑿に著手し夏から秋への所得を道路資金に充てたが到底足りないのです妻から此冬の食餌の心配を囁かれつゝ家中を見廻して作品や家財を金に換へやうと決心し自分の設計で土工を起したのです。

自ら鍬を執り數十の人夫を督し三十四日の土工で驛から眞直に十二間幅百十六間の道路が出來上りました。並木は地面が結氷の爲め一部は春に延ばし兎も角開通式を擧げて之を往十里の爲に差上げる決心です。工費は二千數百圓の勘定ですが土地の鮮人有志が馬車と人の勞力を喜んで寄附して呉れた事です、鮮人にも公德心は立派にあると思ひました。

今日こそ其喜溢るゝ開通式を擧げ時實さんや其他の來賓も土地の有志も喜びの聲を擧げて貰へると思ふと身内は感激に燃る涙ぐましい感謝の心持に私は今包まれてゐます。

（腦廿四日記者に寄せられた背水書伯の手記であり最近の氏の心境を物語つてゐるので無遠慮に載せたのです。（野崎生）

◈新聞外交界

古池己之吉

▲本號に兩々相對して京日から觀た朝新、朝新から見た京日の外交部の人々を載せた序でだから鳥渡附加へる▲朝新外交部長池畑君も亦大島君と同じやうに資産家の生れださうな▲何でも大阪府下吹田在の綿叺の製造問屋の息子ださうであるに何うした運命の彈みか夫れとも彼れの座興からか玆に渡鮮に及び仁川で相當の資本をかけて商賣を營んだ▲所が僅か一年計りで型の如くスッカラカンに磨つて了ひ▲腕一本で世智辛い世の中のお飯を喰はねばならなくなつたんだとある▲又京日の大島君が今の夫人を迎へるまで二人の子供を抱へての辛棒は同輩間でも有名なものだつたさうなが、其媒介は何でも國民新聞の阿部氏だといふ噂さだ▲大島君は五尺八寸の大男だがチャキ〳〵の江戸つ子であるだけに外交をしても長つ尻でクドイことを言ふのが大嫌ひ適當な所でサッサと引上げるといふ流儀ださうな▲池畑君も五尺六寸はあつて決して小さな方じやないコチラは大阪出身、女には大にもてる方だとの大島君の證明がある位だから羨ましいもんだと云ふ者がある▲外交廣告の人々と云へば商工新聞の岩本虎平君や京城日日に井上煥二君などゝいふ人がある▲其他或時には流星の如く現はれて非常な活動をする者もあるがいつとはなく其影の煙の如く消へてしまう人が多い。

△私の家は、寢室も、書齋も二階である。そして寢室は十畳ノ

阮咸餘戲

—最近の感想—

京城雜筆

阮咸餘戲

―最近の感想―

京城日日新聞社　寺田壽夫

晉の阮咸といふ人は、自ら韜晦して世を愚弄して居た。七月七日の七夕の日に、同族は皆庭中に錦繡を曝して、之を祀つた。獨り阮咸は、竿上に犢鼻褌を懸けて曰く『我亦風俗に從はざるを得んや』と。

△

楚の屈原は、『漁夫の辭』に世を諷して、高潔の人士世に容れられざるを嘆いた。即ち一節に『屈原が曰く、吾れ之を聞けり、新たに沐する者は必ず冠を彈く、新に浴する者は必ず衣を振ふ。安ぞ能く身の察々たるを以て、物の汝々たるを受けんや』と。又一節に『漁父莞爾として笑ふ。枻を鼓いて去んぬ。乃ち歌つて曰く、滄浪の水清まば以て吾が纓を洗ふべし、滄浪の水濁らば以て吾が足を洗ふべし』と。屈原が曰くは、屈原の眞心であり、屈原の感情であつた。漁夫が曰くは、屈原の社會觀であり、屈原の人生觀であり、屈原の理性であつた。

△

阮咸は勿論、世の中を愚弄して居た、しかし風俗を眞似て、辛辣な悪戯を爲たことを以て見れば、やはり世の中に未練があつた。可愛いゝから憎いと云ふ反射心理があつた。仕方がない、世間の奴等と一緒に生きて行かうと云ふ諦めがあつた。諦らめの中には生に對する幾分の執著があつた。世間を愚弄しながらも、自分の存在を示さうと云ふ野心があつた。

△

屈原は、世間を呪ひ、人間に愛想がつき、生の執著力が弱かつた、愚弄し潮笑しながらも、自分の存在を示さうとする阮咸の野心がなかつた。阮咸よりは生一本の不平兒だつた。阮咸よりは強烈な反抗兒だつた。そして、遂にはその誠實も、その明智も、唯性格破産の要素として役に立つただけであつた。

△

恐らく、狂愚でない限り、人は生涯の中に、度々阮咸や屈原のやうな心持を體驗するであらう。不平不滿、反抗、猜疑、嫉妬、斯うした破壞的な感情を經驗することがあらう。しかも斯うした感情は、頭腦の明敏な人に於て、一層色彩を明かにする。なぜ世の中が不平だらう?、何故人間は爭鬪せねばならないのであらう?冷靜に考へ見れば、どうせ不平や不滿は免れ難い自然の約束だ。それを今更悔んで見たところで無駄な話である理論はよく判つて居る。それで居てやはり不平がある。不滿がある屈原となつて死なんか、阮咸となつて生きんか――と迷ふ時がある筈だ。

△

日常の食物も、一々檢微鏡で檢査したならば、無數の細菌で埋まつて居るだらう。そして恐らく食ふ氣にはなれまい。何も知らずに食ふところに甘味さがある。安心がある。それかと云つて知つた上は仕方がない。仕方がないと云つて食はずにも居られない。生きんが爲めには食はなければならぬ。不味いものと知りつゝ、危險と知りつゝ食はねばならない。

△

私の家は、寢室も、書齋も二階である。そして窓にはカーテンが引いてない。枕元に、朝日も射し込めば、月の光りも舞ひ込んで來る寢ながら星の瞬きも眺められる。私たちが眼に見ある星のうちで、私たちの太陽は大きいと思つて居たのに、眼に見えない遠い〳〵空の彼方には、四百光年と云ふ素晴らしい距離で、四億二千萬哩の直徑を有するアンテーレズ星があると云ふ。四億二千萬哩の直徑ど云へば地球が太陽を廻る軌道の二倍餘に當るといふ。して見れば、宇宙は、有限であらうが、無限であらうが、どちらにせよ。大きいものだ。それを私は私の小さい窓から覗きながら部屋の中の自分と、廣い世界を考へて居る自分を不思議に思ふことさへある。

△

空を眺めることは吾々に必要なことだ。部屋の中の自分は、常に不滿だ。春が來ればいゝ。早く花が咲いてくればいゝ。それによつて私は幾分でも生のよろこびを感受したいのだ。

□法學士の書店

伊藤種夫

ドクトル工藤武城氏の令弟工藤法學士は京城商業會議所の法規制定者で二三新聞社などにも關係し健筆家で兄武城氏をして漢詩に於ては弟風情には決して敗けないが、文章の方では到底弟に敵はぬと云はせた程だが、近頃本町三丁目に謙々堂書店といふのを開業した。

【二五】

所取つたのですが滅多に大体不
てゐる私に親の病氣を知らせては
ならぬ、武士は死を恐れはしない
と云ふ壯烈な病中の老父の言葉を
す。

舊臘廿四日記者に寄せられた背
水譜伯の手記であり最近の氏の

其影の煙の如く消へてしまう人が
多い。

京城雜筆

古代の信仰

ドクトル 工藤武城

耶蘇新教を拾出したるマーチンルーテルが、數夜に亘りてデモンと云ふ魔神から壓された事があつた。此デモン神は朝鮮の吳刀山神と殆んど其性格を同うする神樣である。

エポハの神に祈つても、エス樣に賴んでも少しも其効驗かなく、デモン神は依然として毎夜ルーテルを襲ふた。

ルーテルは策盡きて、歐米人が今でもやる魔除の法を行ふた。即ち其信者たる婦人の陰毛を請受けて、寢室の入口に吊して置いた。

其効驗は灼然たるもので、其夜からデモン神はぱつたり來なくなつた。

婦人の陰毛を魔除の呪禁とする信仰はルーテルの生國たる獨逸計では無い。其他の基督教國にも殆んど普遍的に行はれて居る信仰である。小さなお守袋の樣な物に入れて首から懸けて居るのを屢見ることがある。

吾日本にも此風習はある。

東京府千住舍人村の毛長神社、箱根權現の末社たる七難そゝ毛社、近江國琵琶湖の竹生島辨才天社の末社同じく七難そゝ毛社、大和國吉野神社の末社靜御前のそゝ毛社、讃岐國の毛長神社、此等は皆婦人の陰毛を祭つたものである

日本の此信仰の原流を遡ると、恐らくは希臘から流れて印度に入り、佛教と共に來たものと考へられる。希臘には今尙此信仰は甚た盛である。

佛說仁王經の中には、七難即滅七福即生が詳しく說かれてある、然して當時印度の風習として、陰毛の長き巫女は殆んと豫言者の如く尊信されたものである。此等が混淆して遂に此信仰を生出したものでは無かろうか。

前には陰毛と神社の關係計り說いたが、如何に神佛混淆でも、多少寺院の方面にもありそうに考へらるゝ。

果して夫がある。奈良國興福寺の寶物中に七難のそゝげと云ふのがある。

此そゝ毛は餘程古くから傳つた物と見へて、扶桑略記の中に斯う云ふ意味の記事が見へる。

『藤原道長が寮僚を率ひて奈良興福寺に參詣の砌り其寶物を拜見した。數ある寶物の中に七難そゝ毛と云ふのがある。道長が此は何かと尋ねたら、主僧が、之は某の妃の陰毛であると答へた。長さ尺餘のものである』

扨て日本及び印度に於て、婦人の陰毛が魔除の呪禁となる事は他の諸國と同樣であるが、唯其異る點は、毛が長からんことを必要條件とするのにある。

婦人科の專門眼から見ると、奈良興福寺の寶物たる七難そゝ毛の尺餘と云ふのが聊か耳障である。

京城醫專の解剖教授故久保君は其博士論文中に、可なり綿密に婦人陰毛を記載して居るが、無論そんなに長いものでは無い。東京帝大醫科婦人科外來患者中に、某醫學士が尺に近いのを經驗したと云つてる。最も正確には京城酒井婦人科病院長の報告の曲尺五寸九分と云ふのがある。故に興福寺の寶物は恐らく他の種の毛であらふと推測する。

外國人にして日本婦人陰毛に就て研究した學者はVerinch, Baely, Doenity, Ploss-Bartebs, など二三の碩學があつて、其に就ての著書もあるが右以上のは無い樣である。

以上は婦人陰毛を善意に取つた信仰であるが、之と反對の信仰も隨分ある。

ッングス族では、陰毛の長くして且多數あれば、惡魔の住所となるとの信仰がある。故に結婚後之を發見すれば、法律上當然離婚の理由ありとされて居る。

回々教でも同樣な信仰があつて其經文リッスに記してある。總て婦人陰毛は脫毛藥及び拔毛器に因て除去される。其器具は多數伯林の人類學博物館に陳列されてあるが、貴金屬に寶石を鏤めた中々精巧を極めて居る。

茲に面白きは、回々教の管長である土耳古皇帝は、回々教義に則る婦人陰毛除去に要する費用は、悉くお手許金から支出される規定である。

◇手相の話

今村芳三

京城第一の豫言者岡村介石君は故奧村五百子女史と親しかつたところから、今に其遺族とも交際してる。所が或る時故女史の娘さん（今京城で幼稚園を經營してゐる）がやつて來てアナタの手相を觀てやらうといふので、茲に一代の名物男、止むなく手を出すと、過去現在未來に亘つて悉く觀相し實によく適中してるには流石の介石君唖然として顏色なしだつたさうないふ事は古から先輩が言ひ盡してあるやうではあるが、自分としての考へを述べる。

盛である。
佛說仁王經の中には、七難即滅七福即生が詳しく說かれてある、

京城雜筆

短歌の話

細井魚袋

自分は歌といふ意を次の三段に區別してゐる。

一、廣義の歌（謠物）
二、狹義の歌（和歌）
三、最狹義の歌（短歌）

廣義の歌　即ち謠物である。謠物即ち歌である。人が思想を言葉に表現したもので上古の歌謠、中古の神樂、催馬樂、今樣歌を初め今の唱歌、俗歌、童謠に至るまで精粗繁簡、高遠溫雅、低調卑俗の差異はあるが、皆謠物で狹義の歌。紀記、萬葉に載せられてある歌の諸體をみると長歌、短歌、旋頭歌片歌の四種である。而してこれ等を總稱して歌又は和歌と謂ふたのである長歌、短歌、旋頭歌の稱の起因は萬葉集に、片歌の稱は古事記にある。最狹義の歌。歌の意味を極く狹く限られるやうになつたのは、中古、古今集からのことである。『人の世になりてぞ三十もじ餘り一もじはよみける』と謂ひて短歌に重きを置くやうになり、古今集に長歌、旋頭歌とを收めてはあるが兩者併せて九首に過ぎないのや古今集以後の勅撰集になつて益短歌にのみ重きを置くやうになつて遂に歌が短歌の謂となつたのである。

◇書く歌より謠ふ歌へ

上古の歌（短歌）は書くことなく、謠はれたもので一句の字數が定まらず、五又は七に足らざる歌（字不足歌）も、餘れるもの（字餘歌）もあつたのである。

さねさし　さがむのをぬに燃ゆる火のほなかに、立ちてとひしきみはも（弟橘比賣命）

たちばなの　花ちる里の　ほとときす　かた戀しつつ　なく日しぞおほき（旅人）

しかしながら奈良朝以後になつて一句の字數漸く完備し五又は七に餘れる歌は尙多くあつたが、足らぬ歌は稀となり、今は全く絕えてゐる。其の絕えた理由は一謠ふ聲の開き苦しき事。二謠ふことより書くことに變遷した事の二つが原因をなして次第に修正せられたものゝやうである。其の一例としてはおしてる。そらみつ等の四言の枕詞が中古以後には皆五音になつておしてる。そらにみつと修正されてゐる。

字餘歌　といふ歌は一句に付き一文字餘るを通例となすも、二字以上餘るものも稀れにはありき。しかして宣長は字餘りを許すべき場合を論して曰く『五もじの句を六もじによみ、七もじの句を八もじによむことは、其の句のなかにあいうおの內のもじあるときにかぎれるなり。大方今古集よりこなた此の格にはづれたる歌はをさをさなきを新古今のころにいたりて、西行、慈圓などこれを犯してみだりにもじのあまれる句をおほくよまれしにより近き世になりては殊に多し。と謂へたものであるが、現代では格を犯したる、西行、慈圓に歸意してゐる。これはとりもなほさず伸縮自在を要求し書く歌より更に上古の謠ふ歌への運動と思はれる。

◇詠むと作る

歌をよむ（詠）つくる（作）といふ事は古から先輩が言ひ盡してあるやうではあるが、自分としての考へを述べる。

余牟といふことは古き言にして、都久留といふことはやゝ後の言なり。といふことを何かで見た事があるが、この詠（余牟）といふ字を研究してみると玉篇に『長言也』とあり、說文には『歌也』と言ふてゐる。即ち詠といふ字は思ひのままを聲に發して、長く、短く或は高く或は低く謠ふとで樹間に啼く、鳥の如く、溪谷を流るゝ水の如く自然でしかも感じの佳い語である。作（都久留）といふ字は『組立つる』といふ意で恰も木や竹を寄せ集めて作り上げる姿なので、自然から離れ、人爲的で、わざらしいので厭である。兼載の言にはあらざれども、古詞をつらねて三十一字に組み立てたる歌は餘情もなく力もなき爲め、人の心を刺す何物もない。

よく適中してるには流石の介石君唖然として顏色なしだつたさうな。

◈筆の藤井氏

川田健一

藤井寬太郎氏と言へば、農場經營では朝鮮の第一人者であるが、此の人には、いろ〳〵な敬服す可き點がある▲先づ非常な活動家であること、計劃が總て滾大であること、遂行力がそれに伴ふて、堅固であること▲それから演說が頗る上手だ▲鳥渡、意外に思はれるのは、あの忙しいのに不似合に、文章も亦た達者なことだ▲各新聞、雜誌への寄稿などを見ると、汽車の中などでサッサと書いて居る▲民間で、これほどの人が他にあるだらうか、鳥渡珍らしい人だと思ふ。

或る日の露聲氏

愚稿紛失の記 下

村生

愚稿とは殖銀理事森悟一氏に對する私の初對面印象記で題して『或日の露聲氏』といふ。右は二月七日の執筆にかゝり、翌八日の夜七時前後、南大門から師範學校前までの電車内か、一度途中下車した永樂町附近かに於て紛失した。私は一旦家に歸つて後之を悟り早速探しに出たが、どうしても見つからぬ。翌日之を社主永樂町人氏に屆出ると『あれは大層よう出來てゐたが』と云はれるので、更に其翌日再稿のものを持參に及ぶと『前の程にいかんね』と言はれる。其次の朝も又別に作稿したのを見せるとやつぱり『前の程に行かぬ』と言はれる。モ一ッ次の朝又別なのを作つて行くと、感心せぬらしく何とも言はないので、次の朝も又其次の朝も毎朝々々別のを書いて行くのであるが永樂町人氏は賞めてくれないのである。毎晩々々疲れて眠るまで床の中で書いたのだ。しまいには『讀んで下さい』といふ張合もないので默つて其邊に置いておく。忘れてるかと思ふと町人氏は決して忘れやしないいつの間にか誤字を正したり筆を加へたりして、仔細に點檢した形跡を留めてゐる。にも拘らず『モーいゝ可減に露聲さんを切り上げろ』とは云つて呉れぬのである。

ところが其後、二三度森さんに逢つた。森さんはいつも機嫌よく逢つてくれたが、コチラが毎日〳〵こんなに腐心してることを一つも知らないんだと思ふとおかしくもあり、腹立たしくもあつたのである。さうして二度逢い三度逢いしてゐながらその初對面の印象を、書くんだからどうしても印象が稀薄に不純になつて行く。

加之、他にもう一つ私の心持ちを根本的に變化さした事情があつた。といふのは原稿を探しに出た晩、其の足で鍾路二丁目の濱洋服店に行つて、新調の洋服を著用し爾來寢る時と入浴時以外は異人の子のやうに洋服ばかり著てゐる。古來居は心を移すと云ふが、衣も亦心を移すもので、印象記執筆の日を境として吾輩の心は森さんと同樣の洋服を著用する事に依つて氣分が一變し著しくハイカラ味を帶び來り、最初に執筆した頃とはまるで違つたものとなつて來た。

斯うして『或日の露聲さん』は或時はジュリアスケーザーの如くに或時は芭蕉翁の如くに、或時は奸雄家康の如くに、又或時は春の朧夜に本町通りで往還つた女の顔の如くに描破され、コチラの腹の虫の加減で勝手に千變萬化して揑造されたのであるが、大體に於て始めは稍如實に正直に書かれたのがしまいには全く飛んでもない森さんに空想化されてしまつたのである。何も恨みがあつてそんな揑造したわけではないのだが『森さんさへなかつたらこんな苦勞もしまいもの』といふ氣にもなる。その恨みが凝つて日日の作品に現はれるといふ筋合になるのである。

兎に角に惑々原稿締切の日となつたので昨夜も例に依て最も新しく最も長い『露聲さん』を認め今日社に持參したが、相變らず『ようも出來た』とも何とも町人氏は言はれないので、夜十二時退社に當り『もう一度書き直しませうか。明朝用ければ間に合ひます』といふと座にあつた夫人が呆れたやうに『もういゝ加減露聲さんはやめたらいかゞ』と言はれる。此時の私には『助かつた』といふ感じと『此まゝでは殘念だ』といふ丸で違つた二つの感情が猛然として戰つた。其時町人氏は『之で苦勞するならいくら苦勞してもいゝ、命をとられても本望だらう』と云つて頗る慘忍な笑ひ方をされた。

風向きは定まつた。

× × ×

一體世の中に死んだ女房と紛失した原稿を賞める位無難なものは少い、私にとつても失つた愚作を賞められるくらい有難い仕合せはない。けれども森さんの言草じやないが、刻々に觀察眼が違つて來るので丸で同じものゝ書けやう道理はない。一篇毎に創作の苦しみを嘗めてしかも段々まづくなる。けれども愚にもつかぬ原稿を落したためにこんなに虐げられた經驗は全く無いことだ。つく〳〵考へて見ると露聲氏も永樂町人氏もドチラも悪い。しかし私の和服が更に悪い。それは左の袖口が肩の邊まで破れてゐたので、人を訪問した時襟卷と一緒に懷中に捻じ込んだ際左の方から原稿を落したのだ。でなくば落ちさうになつてゐたまゝ電車に乘つたのでいつの間にか其邊で落したのだらう。あゝ夜はあけた。呪ふべき町人氏が此稿を待つて居られるであらう。さても〳〵。（三、一）

京城雜筆

豐公雜感

ではないだらうか——。

私は、次の事實を考へる毎に、そ

こんなに勝心してることを一つも知らないんだと思ふとおかしくもあり、腹立たしくもあつたのであ

東に角に敵へ原稿紙の上だけ

たので昨夜も例に依て最も新しく最も長い『露聲さん』を認め今日稿を待つて居られるであらう。さても〳〵。（三、一）

京城雜筆

豐公雜感

永樂町人

◇

秀吉は、少年に人氣が好い。

私も、少年時代は、大に秀吉を崇拜したものである。

◇

私の秀吉崇拜は、二十代、三十代に及んだ。

私は、秀吉を回顧する爲めに、大阪に遊び、伏見に出遊したこともある。

が、四十近くなると、私の熱は、段々醒めた、段々稀薄になつた。

そして、それ迄、面白く思はなかつた家康が、段々親まれるやうになつた。

◇

秀吉は、才氣の人である。

一生の仕事は、華麗である。

是れが、少年時代に、心を動かした原因だ。

併し、趣味は、歳と共にも質實になつて行く。

表面の色彩よりも、内容の味——噛みしめての味を喜ふやうになる斯うして、私は、秀吉から家康へ段々移動して行つた。

◇

私は、今でも家康が好きではないが、秀吉に見醒めした私は、寧ろ家康に、研究心を有つて居ることは、事實である。

◇

秀吉は、大量、大度の人のやうに言はれて居る。

が、彼れが、ほんとうに、大量、大度であつたかドウかは、疑問であると思ふ。

彼れは、固と〳〵才氣發溌の人物である。

其の寛容、大度と思はるゝ事實も實は、彼れの才氣の發揚ではないだらうか——。

信長が勝頼を討滅した時、彼れは中國の旅にあり、此の報を聽いて

『あたら人を殺したることの殘り多さよ、我れ軍中にあらば、强て諫め申して、勝頼に甲信二州を與へて、關東の先陣としたらんに、東國は平押しにす可きに——』

と歎息して居る。

是れは、秀吉の大量と、解釋して宜いものだらうか、彼れの才氣（人間利用の）と、解釋して宜いものだらうか。彼れの宏量、大度と言はれるものには、斯うした内容のものが多いのである。

◇

小牧の戰の時、柳原康政は、大に秀吉の罪惡を數へ、それを高札に書して、四方に揭出した。

秀吉は、それを觀ると、大に嬾怒も、康政の首を擧げしものに、十萬石の賞を與ふ可く激勵した。

が、其の後和議調ひ、家康及び康政を、聚落に引見するや、

『小牧にて札を立てたる時、汝が憎さ首を、一目見んことをのみ思ひしに今斯く和睦に及べはその志を悅び思ふなり、この事を直に言はんが爲め迎へたり、小平太と呼ばんはいかがなり、叙爵然る可しとて、式部大輔とは此の時よりぞ申しける』

是れは、彼れの大度、宏量と見られて居るのである。

が、果して關白の御威光——大度洪懷を、德川主從に誇示するものではないだらうか——。

私は、次の事實を考へる毎に、それを不審と思ふものである。

◇

秀吉は、マダ羽柴筑前時代、信長の使として、荒木村重を、但州有岡に訪問したことがある。

村重の老臣河原林治多は、秀吉の使命の、詐術にあることを察知し村重に勸むるに刺殺を以てした。

それから、二十餘年の後、秀吉意を得るに及んで、草を分けて治多を物色し、それを面縛して、大阪に致し、叢に附するに極刑を以てした。

『治多死に臨んで、すこしも惡、びれず、君の爲めに仇を除くは武士の常のことなり、秀吉舊き怨を忘れず、無道なりと言ひて死にけり』

是れが、秀吉の眞面目ではないだらうか——。

康政を容す所以は、家康の重臣である故であり、太閤の御威風を誇示する所以であり、治多に至つては、憚る所の村重がない、且つ顧慮する所の周邊がない。感情を恣にして、尠しも損する所がない。

◇

秀吉の生涯は、派手である、華麗である。

才人であつたからだ。

秀吉から家康に移ると、峯巒連立中から、坦々たる一平原に出た氣持がする。

家康に奇巧はない。

が、人間味は善に、彼れに多量な心持がする。

◇

武田氏の亡んだ時、家康は、鳥居元忠（甲州郡代）に命じて、馬場美濃の女を求めしめた。

京城雜筆

是れは、女の美容を聽いたからである。

が、元忠は、女を得て、家康に進めず、自ら官舍に拘留して、大に鼻毛を延ばして樂んだ。

人あり、是れを家康に告げると、彼れは、一言

『すべて彦右衞門は、ぬからぬものかな』

と言つただけであつた。彼れは、大名育ちである、彼れは少年時代からの苦勞人である。おのづからなる大度と、寛容とは、彼れに備つて居たのである。

巧者ではない。

◇

家康ほど、自己の凡庸を知つたものはない。

彼れは、物を內輪に見積る性癖があり、自己をも、切詰めて觀察して居た。

それ故、彼れの一生は、勉强、忍苦の一生であつた。

或る時、武田氏の遺臣横田甚右衞門と語つた時、

『武田家にて鐵をゆるく詰め候は、敵の肉の中に鐵の殘らんが爲めなりと言ふを聞き、士の戰に臨むは、皆その君の爲めぞかし、射伏たらば我いくさの利となる可し、後まで人を苦むるは、不仁の業にこそあれ、今日より我家の士は、鐵を堅く詰めよと申し渡されけり』

彼れは、己れを善くせんが爲めに、是れほど省思と、檢束とを、加へたのである。

◇

秀吉は、才氣を以て、天下を籠蓋した氣味がある。

が、家康は、さうした積極味はない。

彼れの天下は、諸侯が彼れを信認し、是れを彼れに委託した迄である。

轉げ込んだ天下——そこに彼れの人格的特味があると思ふ。

財界豫言

—不景氣は漫性的だ—

岡藤村一介石

▲財界の將來觀ですか。

▲最近平井さんの財界視察談に、內地では先頃成立した外債の內から英債三億五千萬圓を引去つた殘り一億五千萬圓が復興費に使用されるので、物價の騰貴、產業の勃興を豫期して財界前途の大勢を樂觀してると云ふ事ですが、普通の頭から觀たら可能性を含んだ尤もらい理屈で、何分かさう云ふ形勢も實現するでしやう、けれども豫て大正十四年まで豫言して居る私の大勢觀からすると、此樂觀說は暴風の前の扇舟に安心を載せて釣を垂るゝ人のやうな危ふな氣を感せずには居られませぬ。

▲コヽで端的に私の所見を披瀝すると、積極政策だとか、何だとか言ふ宣傳を眞に受けて減多に株の安心買でもしたら、それこそ意外の邊から無電が飛來して突風に颯の運命に陷ることが無いとも限らぬ、何しろ災害の多いこの歷史附の年廻りに果して豫想通り復興費に使へるか否かも分らぬ大洋の向う岸にあるタツタ一億五千萬圓を當てにして今から豐年踊りの豫想をするのは恰度芋の國の浦邊にある秋晴れの浪靜な沖の小島へ姉さん冠りの一行が櫓拍子宜しく戀歌唄つて芋掘りに往き收獲半ばに俄かの時化が來て戻るに戻られず生芋かじつて無人の孤島に不安の夜を明かすのと同じ結果に終りはせぬかと想はれます。

尙ほ私の憂慮に堪へないのは復興をお祭の裝飾でもするかのやうに興がつて、ソレを必然的に好景氣が現はるゝやうに云ふ人の多いことです、復興でさへ容易でない況んや復興をやです、歐州大戰を高潮時として爾來世界は落潮時に向つて居ます、此の潮が再び高潮期に入るには、餘程の長歲月を要します其間世界に幾多の變事があるでせう人々は決してハメを外づして浮嫖になつてはならぬ。

編輯餘錄

一記者

▲河野土木課長、最初本社に寄稿された『眠れる京城』が、御本人の知らぬ間に京城日報に載つてるのを發見し急に夫れを取戻して更に別のものを寄稿された

▲警察新聞の田村直一氏の玉稿編輯の都合上止むなく次號に殘しましたことを深謝します。

▲本號には篠田加藤兩博士、山縣先生（隈汀）、藤井寬太郎氏等知名の先輩が非常な御多忙中寸暇を以て御執筆下され、其他操觚者以外で守屋三葉、細井魚袋、堀內滿鍾（ちゝぶや主人）氏等から容易に得られぬ玉稿をいたゞき得たことを特に深く感謝して居ります。

▲來月號には三越支店長橋本勞次郎氏、李王職事務官今村鞆氏、京電專務武者錬三氏、遞信局長蒲原氏等にも御執筆をお願ひすることゝなつて居ります。

彼れの天下は、諸侯が彼れを信認　幸かじつて無人の孤島に不安の夜

官製食卓鹽

朝鮮總督府專賣局製造の本品は理想的經濟的の調味料で文化生活に缺ぐべからざるものであります

德用大瓶小型振出瓶等數種の美しい瓶入で價格低廉です是非御使用願ひます

京城府南大門通二丁目九七九八

發賣元　富田商會

長電話本局三三〇九番
振替京城四五六八番

不二興業株式會社

社長　藤井寛太郎

支配人　澤村九平

素朴な古代の銅瓶や典雅な青磁の壺に山茶花でも挿して眺めて御覽さい自然の美と藝術の美は渾然として看る者の心に融合して參ります、或はまた傑れた南畫の軸に對し苦茗を啜れば一日の疲勞を醫やして餘りありませう

美術品を贅澤視する時代は去りました、少くとも皆樣の生活を豐富にし、色彩あらしめるものとして眞に良き美術品は必要なものと思ひます

御不用の書畫骨董は買入れます

賣立入札の需に應じます

無料で鑑定致します

新古美術品
書畫寶石商　采雅莊　大舘長節

京城大和町一丁目

電話本局一三五五番

時計
貴金屬
寫眞機
自轉車
京城府本町一丁目
大澤商會
電話本局
二三六二番
四三八〇九番

清新な
純毛セル地
英ネル
モス着尺地
友仙モス
帶地
京城本町二丁目
丸一吳服店

共濟生命保險株式會社
京城出張所
京城府壽町

京城手形交換所
組合銀行
電話本局二七八八番

南滿洲鐵道株式會社
京城管理局

キリンビール
ダイヤレモン

京城本町一丁目
明治屋
電話本局二一二二番
一七二二番

產山剛金景絶之下天

飴剛金

不老長生之靈果松實應用

◎銘仙と
毛糸◎

京城本町
ちゝ姫や

堀内滿輔

電話本局
八五五番
九〇〇番
〇六五番

◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます

京城雜筆（第六十一號）

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十三年三月十三日發行（毎月一回十日）發行